

台 計	労働者数不明の炭坑	六、五、四、三、二、一、						炭坑の分類		労働数による
		六、	五、	四、	三、	二、	一、	の坑炭	の者働勞	
		千人及有つ炭坑の	労働者及び有つ炭坑の	労働者以上有つ炭坑の	労働者以上有つ炭坑の	労働者以上有つ炭坑の	労働者以上有つ炭坑の	の坑横と坑堅	の者働勞	ドネーツク炭産地に於て
二六九	九	五	五	二九	二九	七七	二七	の坑炭	の者働勞	一炭坑に對する割合
七六三、二五、一六七	四〇(二、二九六)?	一六	六七	一六七	三三九	一〇二	三三	の坑横と坑堅	の者働勞	
一八三、一六	一五、〇〇八	五三、六〇五	二三、一六四	五九、一三〇	二八、六九三	三、四八九	一七八	採炭量 (ドーブ千位單)	蒸気機械の數	一炭坑に對する割合
二三八	一八	二九	二四	八七	六三	八	一	蒸気力	蒸気機械力	
五、八二六	八〇八	一、七二四	七五六	一、七〇四	七六六	六六	一	蒸気力	蒸気機械力	一炭坑に對する割合
九三、五		一、七八六、八一七、八六八、三九、六	七三九、六四、六三二、八四、八一五、二	二四〇、四二、〇三八、九三	四八、三二四、一〇、五〇、五	一六、二五四、三〇、一〇、八	六、四六、四	労働者	石炭	
六八一、三〇、九		九、六	四、八	三	一〇、五	〇、一	一	労働者	石炭	一炭坑に對する割合
二二、六		五七四、六	一五二、二	五八、七	六、四	〇、八	一	労働者	石炭	
七、一		一〇、六	六、三	八、四	四、九	二、八	一、〇	労働者一人に對し (ドーブ千位單)	石炭	

にしよう。(此處では炭坑の中位のものは、ロシアの他の凡ての地域に於けるものよりも小さい。)労働者の數によつて炭坑を分類すると、斯んな光景を呈する。(二八六頁参照)

斯くこの地域には(たゞこの地域に於てのみ)極端に小さい農民の炭坑がある。然しこれ等の炭坑は、その數が多いにも拘らず、一般の採炭業に於ては全く微々たる役目を演じてゐるに過ぎない。(一〇四の小炭坑は、全炭産量の二%を出すに過ぎない。)そして特に労働生産力が著しく低い。その反對に三七の大炭坑は、労働者總數の約五分の三を占め、全採炭量の七〇%以上を出してゐる。労働生産力は、炭坑の規模が大きくなるに従つて、剩へ機械の應用に無關係に高まる。(例へば、蒸汽力の數により、または一労働者の生産量によつて、炭坑は五種類または三種類となる。)ドネーツク流域地帯に於ける採炭業の集中は、益々發達して來た。即ち一八八二年—一八八六年の四年間に、五二二人の石炭搬出者の中から二一人は各々五、〇〇〇車以上(即ち二百萬ブード)を運び出し、全部で四八〇、八〇〇車中二二九、七〇〇車を、即ち畧半數近く運び出したことになる。一八九一年—一八九五年の四年間に、搬出者は八七二人で、その中五五人は各々五、〇〇〇車以上を出した。一人が全部で一、一七八、八〇〇車の中から九二五、四

〇〇車を、即ち總數の十分の八以上を運び出した譯である。(註。エヌ・エス・アヴダーゴフ氏の資料『ドネーツク採炭工業の簡單なる統計的概観。』ハリコフ、一八九六年。)

鑛山工業の發達に關して今迄述べた資料は、二つの關係に於て特に重要視されてゐる。即ち第一に、これ等の資料は、特に明瞭に社會經濟關係變遷の本質を示してゐる。その變遷は、ロシアに於ける國民經濟の凡ての範圍に於て行はれてゐるものである。第二に、これ等の資料は、發達しつゝある資本主義社會に於て、製造材料を、即ち個人的需用の對象でなく、製造上の需用の對象を造る所の工業範圍が、特に迅速に生長しつゝあると云ふ理論的斷定を説明するものである。社會經濟に於ける二様の組織の變遷は、鑛山工業に於て特に明瞭に示されてゐる。それは、此處では特別地域が二様の組織の典型的代表者となつてゐるからである。即ち一方の地域に於ては、資本主義以前の古い習慣を見ることが出来る。幼稚で平凡な技術と場處に縛り付けられた住民の個人的束縛と堅固な階級的傳統と獨占とを見ることが出来る。他の地域に於ては一切の傳統との完全な分離、技術的變革、純資本主義的大精工業の迅速なる成長を見ることが出来る。(註。最近ウラルも新生活條件の影響の下に革新されるやうになつて來た。而してこの革

新は、鐵道が若しウラルを更に密接に『ロシア』と結び付けるやうになつたならば、一層迅速に行はれるであらう。この點に於て、特に重要な意義を有ち得るものは、豫定通りにウラルと南露とが鐵道により連結され、ウラルの鑛石とドネーツクの石炭とが交換されるやうになることである。今日迄ウラルと南露とは、殆んどお互に競争せず、異つた市場に於て活動し、主に官廳の注文で立つてゐた。然し、豊富な雨のやうに降り注いだ官廳の注文は、決して永續するものではない。この實例から見ると、特に經濟派——民衆派の誤謬が明白である。彼等はロシアに於ける資本主義の進歩を否定し、我國の企業家等は農業に於ては好んで請負仕事に走り、工業に於ては作業の家庭分配に走り、鑛山業に於ては労働者の固着と小作業場間の法律による競争禁止とに走ると云ふことを指摘してゐるが、斯の如き議論は非論理的である、この議論には歴史的背景が、全然無視されてゐることが眼に映ずる。實際、我國の資本主義は、資本主義前の經濟方法の利益に乗じようとする我國企業家の傾向を計算に入れて置かなければならないのに、資本主義の發達を阻止し、而も多くの場合法律の力を以て支へられてゐる舊習慣の遺風の方は、それを計算に入れなくてもよいのは、一體何故であらうか！ 例へば、南露の鑛山業者等

が、労働者の固定と小作業場の競争に對する立法的禁止とを渴望してゐると云ふことは、何も驚くに當らない。何故かと云へば、鑛山業の他の地域に於て、この固定とこの禁止とは、昔から今日迄存在してゐるからである。何故かと云へば、他の地域に於て、製造所所有者等は技術が拙劣で労働者が極めて安く、且つ従順である爲に、鐵道製造に於て何の心配もなく『一哥に對して一哥を得、また時としては一哥に對して一哥半も得る』（註。エグーノフの『家内工業研究』第二卷一三〇頁）ことが出来るからである。で、寧ろロシアの資本主義前の經濟制度を理想化する能力ある人々が、即ち資本主義の發達を阻害する凡ての陳腐な施設を根絶することの最も痛切な成熟した必要に眼を閉ぢてゐる人々が、斯の如き條件の下にあることに驚くべきではなからうか？（註。例へばエヌ——オン氏の如きその凡ての悲歎を單に資本主義にのみ向けた。（殊に南露の鑛山業に關し、『家内工業概観』二二一及び二九六頁）そしてロシアの資本主義關係を我國の鑛山業の資本主義前の組織に全然變へて了つた。）

他面鑛山業の生長に關する資料が重要な譯は、その資料が個人的需用品生産の生長に比較すると生産需用品の爲の資本主義と國內市場の方が遙かに迅速な成長を遂げてゐることを示して

るからである。エヌーオン氏の如きは、この事情を無視し、鑛山業生産品に對する國內的全注文が、『多分極めて速かに滿されるであらう。』などと判斷してゐる。(『家内工業概観』二二三)それは、金屬や石炭やその他のものの需用量(一住民に對して)が、資本主義社會に於て不變のまゝ停滯せず、また不變のまゝ停滯し得ずに、必然的に高められて行くからである。鐵道網が新たに一露里延長される毎に、職場が新たに建てられる毎に、農村のブルジョアが鋤を仕入れる毎に、鑛山業生産品に對する需用量は高まるのである。例へば、若し一八五一年から一八九七年までのロシアに於ける銑鐵の需用が、一住民に對し一四フントから一 $\frac{1}{3}$ ブードにまで生長したとすれば、この後の量は、更にまだ餘程生長するやうになる。それは、先進各國に於ける銑鐵需用量に接近する爲である。(ベルギーやイギリスでは、一住民に對し六ブード以上である。)

## 五 資本主義的大企業に於ける労働

者數は増加するか？

吾人は工場制工業と鑛山工業とに關する資料を瞥見したので、こん度は此處に掲げた問題に對して回答を試みてもいい。經濟派——民衆派はこの問題に興味を有ち、この問題を消極的に解決した。(ヴェー・ヴェー氏、エヌ——オン氏、カールイシェフ氏、カブルコフ氏等は、ロシアに於ける製造所工場労働者數は、増加しつつあるが——假令増加しつつあるとしても——住民の増加より遅いと斷定した。)先づ言つて置かねばならぬことは、この問題の本質が、商工民は農業住民のやうに増加してゐるか何うか(この事は後に述べる)と云ふ點か、或は大機械精工業に於ける労働者數は、増加してゐるか何うかと云ふ點かにある筈だと云ふことである。工業的小作業場若くば粗工業に於ける労働者數は、發達しつつある資本主義社會に於て増加すべきであるとは斷定出來ない。何故かと云へば、工場により多く幼稚な形態を帯びた工業を不斷に壓迫するからである。先に詳述した如く、我國の製造所工場統計資料は、必ずしもこの工場なる術語の科學的意味に於て工場に屬する譯ではない。

吾人は吾人の興味を惹く問題に就いての資料を瞥見する爲に、第一に凡ての製造業に關する報告を、第二に長い期間に互る報告を取らねばならぬ。たゞこの條件の下にのみ、資料の多少

の比較が保證されるのである。吾人は一八六五年及び一八九〇年を——改革後の時代の二十五年間の時期を取り、手許にある統計的資料に總計を與へることとする。製造所工場統計は、一八六五年度分として、最も充實した報告を提供し、その中酒造業、ビール製造業、甘菜製糖業及び煙草製造業を除いた歐露の凡ての製造業に於ける製造所工場労働者を三八〇、六三八人と算へてゐる。これ等の製造所に於ける労働者數を決定する爲には、手許にある唯一の『陸軍統計集』の資料を採用することとなる。而もこれ等の資料は、先に證明した如く、訂正さるべきである。前記の製造業に於ける一二七、九三五人の労働者を付け加へると、(註。ビール製造業に於ては、六、八二五人。此處にも誇張がある。然し訂正する爲に材料がない。甘菜製糖業に於ては、六八、三三四人(『大藏省年報』による。)煙草製造業に於ては、六、一一六人(訂正済)酒造業に於ては、四六、六六〇人(訂正済))吾人は一八六五年の歐露に於ける製造所工場(國産税を賦課され、または賦課されぬ製造業)労働者總數五〇八、五七三人と云ふ總計を得る。(註。ツীগン・バラノフスキ氏は一八六六年度の分にヴィシニャコフ氏の四九三、三七一人と云ふ數字を引用してゐる。『工場』三三九頁)吾人は如何にして斯の如き數字が得られたかを知らない。然



しこの數字と吾人の引用した數字との差は、極く僅かである。(一)六五%の増加で、住民の増加より更に著しい。然しながら注目する必要があることは、實際上の増加は、疑ひもなくこれ等の數字の示す以上であつたと云ふことである。即ち既に詳細に證明された如く、一八六〇年代の製造所工場の資料が誇張されてゐるのは、小さい家内工業的、手工業的及び農業的各作業場は勿論家庭労働者までもこれに含まれてゐる結果である。たゞ遺憾ながら吾人は、材料が不足である爲に、これ等凡ての誇張を完全に訂正し得ない。殊に後に最大工場に於ける労働者數に關するもつと正確な資料を引用することになるから、此處では寧ろ部分的な訂正を避ける方がいゝと思ふ。

製鐵所の統計に移る。一八六五年には鑛夫の數は、製銅業並に製鐵業と、それから金坑と白金坑とに就いてのみ算へられてゐる。歐露では一三三三、一七六八である。一八九〇年には、これ等の製造業に於ける労働者は、二七四、七四八人であつた。即ち二倍よりもつと多い譯である。この最後の數は、一八九〇年度の歐露に於ける鑛夫總數の八〇・六%に當る。前記の製造業は、一八六五年に鑛夫總數の八〇・六%を網羅してゐたことを認めると、(註。諸他の鑛山業

中には、労働者数が餘り増加しないらしいものもあれば、(製鹽業) 労働者数が非常に盛んに増加すべき筈のものもあれば、(採炭業及破石業) また一八六〇年には全くなかつたものもある。

(例へば水銀採取業) 吾人は一八六五年には鑛夫總計一六五、二〇三人を得、一八九〇年には三  
四〇、九一二二人を得る。一〇七%の増加である。

更に資本主義的大企業に於ける労働者数には、矢張り鐵道労働者も屬してゐる。一八九〇年  
歐露に於ては、ポーランド及びカフカズを合して、鐵道労働者は二五二、四一五人であつた。

(註。『鐵道並に内地水路の統計的概観』サントクト。ペテルブルグ。一八九三年。二二二頁。交通省  
發行。遺憾ながら吾人はたゞ歐露だけを區別する材料を有つてゐなかつた。吾人は鐵道労働者  
中に常備労働者ばかりでなく、臨時労働者(一〇、四四七人)と日雇労働者(七四、五〇四人)を算  
へる。臨時労働者の一年の平均給料は、一九二留で、日雇労働者の方が二三五留である。一日  
の平均日當は、七八哥である。それ故に臨時労働者も日雇労働者も一年の大部分は仕事をして  
ゐる。従つてエヌ——オン氏がしてゐるやうに(『家内工業概観』二二四頁)彼等を見遁すことは  
誤りである。)一八六五年に於ける鐵道労働者数は、不明であるが、然しその數は略々近い見當

で決定出来ぬこともない。何故かと云へば、鐵道網の一露里の中にある鐵道勞働者數は、餘り激しく動搖しないからである。一露里に九人宛と算へて、一八六五年に於ける鐵道勞働者數は三二一、〇七六人となる。(註。一露里に對する鐵道勞働者は、一八八六年が九・〇、一八九〇年が九・五、一八九三年が一〇・二、一八九四年が一〇・六、一八九五年が一〇・九であつた。斯くこの數は、明かに増加の傾向を帯びてゐる。『一八四五年の終りに於けるロシアの鐵道は二、五六八露里であつた。』——第二版には漏れてゐる。編輯者。一八九〇年及び一八九六年の『ロシアに於ける報告集』一八九七年の『財政通報』第三九號參照。辯明して置くが、吾人は本節ではただ一八六五年と一八九〇年との資料を比較するだけにしたいのである。それ故に吾人が鐵道勞働者數を帝國全體から取らうが、或はたゞ歐露だけから取らうが、一露里に九人宛としようが或はそれ以下としようが、鑛山工業の全範圍に互らうが、或はその中から一八六五年度の資料を有つてゐるものだけに止めようが、そんなことは全く何うでもいふことになる。)

吾人の計算を總計することとしよう。

資本主義的大企業に於ける労働者數。(單位千人)

年次	工場制工業に於て	鑛山工業に於て	鐵道に於て	總數
一八六五	五〇九	一六五	三三二	七〇六
一八九〇	八四〇	三四〇	二五三	一、四三二

斯く資本主義的大企業に於ける労働者は、二十五年間に二倍以上に増加した。即ち労働者數は一般住民より遙かに速く増加したばかりでなく、都會住民よりも迅速に増加した。(註。歐露に於て一八六三年には、都會住民は六百十萬人であつたものが、一八九七年には一千二百萬人になつた。)それ故に労働者が農業から、小營業から工業的大企業へ益々多く引離されて行くことは、最早疑ふ餘地がない。(註。資本主義的大企業に於ける労働者數に關する最も新しい資料は、左の如くである。一九〇〇年度の國産税を賦課されない企業に於ける製造所工場労働者數に就いての資料がある。一九〇三年度の國産品製造業に關する資料がある。一九〇二年度の鑛夫に關する資料がある。鐵道労働者の數は、一露里に對し一人宛と算へてこれを決定するこ

とが出来る。(一九〇四年一月一日までの報告) 一九〇六年の『ロシア年報』及び一九〇二年の『鑛山工業に關する調査報告集』参照。

これ等の資料を綜合すると、左の如き結果となる。歐露五十縣に於て、一九〇〇年—一九〇三年まで製造所工場労働者は、一、二六一、五七一人。鑛山労働者は四七七、〇二五人。鐵道労働者は四六八、九四一人。合計二、二〇七、五三七人。ロシア帝國全體では、製造所工場労働者は一、五〇九、五一六人、鑛山労働者は六二六、九二九人、鐵道労働者は六五五、九二九人で、合計二、七九二、三七四人である。本文に述べたことは、更にこの數字をも證明してゐる。(第二版の註。)(三)我が民衆派が屢々引用し、また屢々悪用したその統計資料は、かう言つてゐる。然しながら彼等の統計悪用の最頂點となつてゐるのは、實際幻想的な左の如き方法である。即ち全住民に對する製造所工場労働者數の關係が採用されてゐる(一!)そして得られた數字(約一%)を基礎として、労働者のこの『一握』は、實に微々たるものであるなど言つてゐる! 例へばカブルーコフ氏の如きは、『ロシアに於ける工場労働者』の住民に對する割合計算を反復して、次の如くに言ひ續けてゐる。『西歐では(一!)加工々業に従事する労働者數は……』『工場労働者』と

『加工々業に従事する労働者』とは、全然同一ではないと云ふことは、何んな中學生でも承知してゐることではあるまいか？……イギリスに於ける五三%からフランスに於ける二三%まで『全住民に對し全く異つた關係を成してゐる。』『工場労働者階級の關係に於ける差異は（！）西歐でも我國でも極めて大きく、我國の發達步調と西歐の發達步調とを同一視すると云ふやうなことは、あり得ないことである。』斯んなことを書いた者は、教授で、専門の統計學者である！ 彼は異常の勇敢を以て一氣に二つの過言を敢てしてゐる。即ち（一）工場労働者は、加工々業に従事する労働者と置き換へられてゐると。（二）加工々業に従事する労働者は、加工々業に従事する住民と置き換へられてゐると。我國の學識ある統計家達の爲に、これ等の差別の意味を説明しよう。一八九一年の記録によると、フランスでは加工々業に従事する労働者は、三百三十萬人——住民の十分の一以下（仕事別にされた住民は、三千六百八十萬人。仕事別にされない住民は、百三十萬人）であつた。これは、獨り工場労働者であるばかりでなく、凡ての工業的作業場や企業に於ける労働者である。加工々業に従事する住民は、九百五十萬人（全民の約二六%）であつた。此處では經營主及びその他（百萬人）も労働者數に加へられてゐる。次に従業員は

二十萬人、家族は四百八十萬人、使用人は二十萬人であつた。(註。『The Statesman's Yearbook』一八九七年。四二七頁。)ロシアに於けるこれ等の關係を説明する爲には、實例として各部分的中心地を捉へることとなる。何故かと云へば、全住民の職業統計は我國にないからである。ペテルブルグでは製造所工場統計は、一八九〇年に製造所工場労働者五一、七六〇人を算へてゐるが、(『工場案内』による)一八九〇年十二月十五日のサンクト・ペテルブルグの人口調査によると、加工々業に従事する者は、三四一、九九一人であつた。而して加工々業による職業別は、左の註の如くである。(註。『一八九〇年の人口調査によるサンクト・ペテルブルグ』サンクト・ペテルブルグ。一八九三年。二乃至十五の營業別總計がある。營業に従事してゐるものは、全部で五五一、七〇〇人、その中二〇〇、七四八人は、商業、運送業、飲食店の營業に従事するものである。『獨立労働者』と云ふのは、雇傭労働者を有たぬ小生産者である。)

男 女 數

	獨立勞働者(即ち自給勞働者)	家族及び使用人	合 計
經 營 者	一三、八五三	三七、一〇九	五〇、九六二
管理者(従業員)	二、二二六	四、五七四	六、八〇〇
勞 働 者	一四八、一一一	六一、〇九八	二〇九、二〇九
單獨勞働者	五一、五一四	二三、五〇六	七五、〇二〇
總 計	二二五、七〇四	一二六、二八七	三四一、九九一

他の實例がある。即ちニゼゴード縣ゴルバトフスキイ市外地帯ボゴロードスコエ村(この村は、前述した通り、農業地でなく、『まるで一皮革製造所』の觀を呈してゐる。)では、一八九〇年度の『工場案内』に依ると、三九二人の製造所工場勞働者が算へられてゐる。然るに營業に従事してゐる住民は、一八八九年の自治會記録によると、約八千人ばかりになる。(住民全體は九、二四一人で、營業に従事してゐる家族は、十分の九以上である。) エヌー—オン氏、カブル



スコフ氏一派は、この數字を考へて見るが良い？

第二版の増補。現在吾人は全住民の職業統計に關する一八九七年の一般的記録の資料の結果を有つてゐる。左に吾人が全ロシア帝國に就いて作つた資料を掲げて置く。(註。『一八九七年一月廿八日の最初の全人口調査資料研究の結果を帝國全體に就いて集めた一般資料集』中央統計委員會發行。第二卷、二二の表、二九六頁。爾餘の職業分類は左の如くである。(イ)一、二及び四、(ロ)三及び五—一二、(ハ)一四及び一五、(ニ)一六及び六三—六五、(ホ)四六—六二(ヘ)四一—四五、(ト)一三、(チ)一七—二一、(リ)二二—四〇。)(單位百萬)

職業

獨立者

家族

全人口

(男 女 共に)

(イ) 官吏及び軍人	一、五	〇、七	二、二
(ロ) 僧侶及び自由職業者	〇、七	〇、九	一、六
(ハ) 座食者及び恩給生活者	一、三	〇、九	二、二
(ニ) 自由を失へる者、淫賣婦 職業未定者、職業不明の者	〇、六	〇、三	〇、九

非生産住民の合計

四、一

二、八

六、九

(ホ) 商業家	一、六	三、四	五、〇
(ヘ) 通信交通事業關係者	〇、七	一、二	一、九
(ト) 民間事業勤務者、使用人、日雇人足	三、四	二、四	五、八
半生産住民の合計	五、七	七、〇	一二、七
(チ) 農業家	一八、二	七五、三	九三、七
(リ) 工業家	五、二	七、一	一二、三
生産住民の合計	二三、四	八二、六	一〇六、〇
總計	三三、二	九二、四	一二五、六

これ等の資料が、製造所工場労働者數を全人口に比較しようとする民衆派の方法の馬鹿氣たものであると云ふことに就いて前に述べた所を完全に確定してゐることは、言ふ迄もない。

ロシアの全人口を職業別にするに就いた引用した資料を、先づ第一にロシアに於ける全商品生産と資本主義との基礎としての社會的勞役類別の説明の爲に分類するのは、興味のあることである。この見地から全住民は三つの大きな項目に區別さるべきものである。即ち一、農業住

民、二、商工業住民、三、非生産（もつと正確に言ふと、經濟的活動に参加しない）住民である。引用した九組（イからリまで）の中で、たゞ一つの組だけは、この根本的な三項目中の何れにも直ちに、そして完全に屬せしめることが出來ない。それは、トの組、即ち民間事業勤務者、使用人、日雇人足等である。この組は、商工業住民と農業住民との略々中間ぐらゐに配置しなければならぬ。吾人はこの組の中で都市に居住してゐるものとして申告された部分（二百五十萬人）を第一の項目に屬せしめ、市外地帯に居住する者（三百二十萬人）を第二の項目に屬せしめた。さうすると、ロシアの全住民分類表は、左の如きものとなる。

農業住民

九七、〇（百萬單位）

商工業住民

二一、七（同）

非生産住民

六、九（同）

合計

一二五、六（百萬單位）

この分類表で明かである通り、一面商品流通と、それから商品生産とは、ロシアに於て全く堅固な脚で立つてゐる。ロシアは、資本主義國である。他面それによつて判ることは、ロシアが他の資本主義諸國に比すると、その經濟的發達に於て、まだ非常に遅れてゐると云ふことである。

更にまだある。吾人が本書に於て行つた分解の後に挙げたロシアの全住民の職業的統計は、ロシアの全住民がその階級的狀態に應じて、即ち社會的生產組織に於けるその境遇に應じて區別されるのは、一體如何なる根本的カテゴリーに據るものであるかと云ふことを略々決定する爲に利用され得るし、又利用さるべきものである。

斯の如き——つまり大略的な——決定の可能な理由は、吾人が經濟的な根本集團に農民を一般的に分類することを知つてゐるからである。所が、ロシアの農業住民の全大衆は、これを全部農民社會と見ることが出来る。何故かと云へば、地主の數は、その總計に於て全く微々たるものだからである。のみならず、地主の大部分は、座食者官吏、上流貴顯及びその他のものとして算へられてゐる。九千七百萬人の農民大衆に於て、三つの根本的集團を區別する必要がある

る。即ち下の組は——住民中のプロレタリア及び半プロレタリア級で、中の組は——貧乏な小經營者で、上の組は——裕福な小經營者である。異つた階級的要素としてのこれ等集團の根本的經濟的特徴は、吾人が前に詳細に解剖した通りである。下の組は——無産住民で、主として若くは半ばまでは勞働力賣却によつて生活してゐる。中の組は——極めて貧乏な小經營者である。何故かと云へば、中流農民は良い年でさへ辛ふじて辻褄を合せてゐるからである。然し此處での生活の主なる根源は、——『獨立した』（勿論、獨立したかのやうな）小營利事業である。最後に上の組は——裕福な小經營者で、相當に多數の小作人や日傭人夫や分讓地を有つてゐる者、概して凡ての雇傭勞働者を搾取してゐる者である。

總額の中で、これ等の集團に落ちて行く金額の大略は、五〇%、三〇%及び二〇%である。吾人はこれまで絶えず戸數若くは事業數の分前を取扱つて來た。でこん度は住民の分前を取扱ふことにしよう。この變更の爲に下の組は増加し、上の組は減少する。然し實際に斯の如き變更は、疑もなく過ぎ去つた十年間にもロシアに於て起つた。これを争ふ餘地なきまでに證明してゐるのは、農民の間に馬がなく、農民社會が互壞し出したことや、それから農村が貧乏で、

仕事がないことなどである。

つまり吾人は農業住民の中から約四千八百五十万人のプロレタリア住民と半プロレタリア住民と、約二千九百十万人の最も貧しい小經營者とその家族と、約千九百四十万人の裕福な小營利事業に従事してゐる住民とを有つてゐる譯である。

更に商工業住民と非生産住民とを如何に割り當てるかと云ふ問題が起る。非生産住民の中には、明かに大ブルジョアの住民の要素がある。即ち凡ての座食者は（資本と不動産とからの收入で生活する者は）——我が統計に於ける第十四組の最初の項目は——九十万人である。次にブルジョア知識階級の部分と軍人や文官等の大官吏及びその他の部分とがある。此處へ持つて來なければならぬものは、全部で約百五十萬人ある。この非生産住民中の他の極地には、陸軍や海軍や憲兵隊や警察などの下級者（約百二十萬人）と使用人と多數の勤務者（全部で五十萬人以内）と殆んど五十万人の乞食と浮浪者などが立つてゐる。此處では根本的經濟的タイプは最も接近してゐる集團をたゞ概算的に割當ることが出来る。即ち約二百萬人をプロレタリア住民と半プロレタリア住民とに（一部分は人足の一團に）約百九十万人は最も貧乏な小經營者に、そ

して約百五十萬人は裕福な小經營者に割當てることが出来る。裕福な小經營者中には、従業員、官廳勤務者、ブルジョア智識階級などの大部分も算へられてゐる。

最後に、商工業住民中には、疑もなくプロレタリアートが最も多く、プロレタリアートと大ブルジョア間の淵が最も深い。然しながら調査書は、この住民の經營主、單獨労働者、労働者などに割當ることに關する何等の資料をも提供してゐない。たゞペテルブルグの工業住民に關する前記資料を模範とするより仕方がない。ペテルブルグの工業住民は、製造業に於ける境遇に従つて割當てられてゐる。これ等の資料を基礎として、概算的に約七%を大ブルジョアに、一〇%を裕福な小ブルジョアに、一二%を貧乏な小經營者に、六一%をプロレタリアートに屬せしめることが出来る。ロシア全體に於て、工業上の小製造業は、勿論ペテルブルグに於けるよりも遙かに活氣がある。然しその代り吾人は多數の單獨労働者と經營主の爲に家庭に於て働いてゐる家内工業家等とを半プロレタリア住民に屬せしめない。それ故にこの一般的に、そして全體的に採用した關係は、多分實際と僅かに異なるであらう。さうすれば吾人は約百五十萬人の大ブルジョアと、約二百二十萬人の裕福なブルジョアと、約四百八十萬人の貧困な小生産者と、約千

三百二十萬人のプロレタリア及び半プロレタリア階級の住民とを商工業住民の爲に得た。  
 農業住民と商工業住民と非生産住民とを一緒に合すると、ロシアの全住民の爲に階級的境遇  
 による大略的割當が得られる。

全 住 民

大ブルジョア、地主、高級官吏等

約 三、〇（百萬單位）

裕福な小經營者

同二三、〇（同）

貧乏な小經營者

同三五、八（同）

プロレタリアと半プロレタリア

同六三、七（同）

合 計

約一二五、六（百萬單位）

吾人は我がカデット（譯者註。立憲民主黨）及びカデット化した經濟學者や政治家等の方面から  
 ロシアの經濟に關する斯の如き『單純化された』思想に對し憤激の聲が發せられることを疑は



ない。それは——嚴密なる解剖に於て經濟的矛盾の深淵を消滅させ、同時にこれ等の矛盾の全體に對する社會主義的見解の『粗雜』であることを訴へるのは、極めて便利であり、極めて有利である。吾人の到達したやうな結論に對する斯の如き批評は、勿論科學的意義を有つてゐるものではない。

それ等の數字の接近程度に關しては、勿論部分的不一致はあり得る。この見地からロシーツキイ氏の勞作、即ち『一八九七年ロシヤに於ける人口調査書』に注意を拂ふことは、興味がある。(『ミール・ボージイ』第八號、九五) 著者は、勞働者と使用人との數に關する調査の直接資料を利用した。ロシヤのプロレタリア住民を彼は、この資料に據つて、二千二百萬人と算定し、農民と土地所有者とを八千萬人とし、經營者と商工業従事者とを約千二百萬人とし、非生産住民を約千二百萬人とした。

この資料に據ると、プロレタリアートの數は、吾人の結論に餘程接近してゐる。(註。此處でロシーツキイ氏の利用した勞働者と使用人との統計に就き詳細に論じてゐる餘地がない。この統計は、一見して分る如く勞働者數を餘りに減少し過ぎてゐる。『賃銀』の影響を受ける農民の

貧困者中に、家内工業家及びその他の中に、半プロレタリア住民の偉大な大衆を否定すると云ふことは、ロシアの經濟に關する凡ての資料を嘲笑することになる。たゞ記憶して置かねばならぬことは、歐露だけで、馬を有たぬ家が三百二十五萬戸、馬一頭だけを有つてゐる家が、三百四十萬戸であることや、貸借、『賃銀』、豫算及びその他に關する自治會統計報告の統一されてゐることを想ふだけでも、半プロレタリア住民の莫大なる數は、疑がはれなくなる。プロレタリア住民と半プロレタリア住民とを一緒にすれば、農民社會の半數を成すと云ふことを承認することは、多分農民社會の數を減少するもので、決してそれを誇張するものでないことを意味する。然るに農業住民を除くと、プロレタリア及び半プロレタリア階層の割合は、必ずまだ高い。

若し全一な經濟的光景を細分したくなければ、更に商工業監督者、従業員、ブルジョアの階級、官吏階級などの大部分を裕福な小經營者に屬せしめる必要がある。此處で吾人は非常に高い數字を以て斯の如き住民の數を決定すると同時に、極めて細心な行動をしたやうである。即ち貧しい小經營者の數を増加し、裕福な經營者の數を低下していゝ譯である。然し斯の如き

區別は、勿論統計の絶對的確實性を要求するものではない。統計は、多方面的な解剖を以て既定の社會的經濟的關係を説明すべきもので、吾人の間に屢々見るやうなそれ自體に於て目的を有つ態度に變ずべきものではない。ロシアの住民中に小ブルジョア階層の多いことを抹消することは、取りも直さず我國の經濟的活動光景の虚飾を意味するものである、

## 六 蒸汽動力の統計

蒸汽動力を生産に應用することは、大機械精工業の最も特質的な特長の一である。従つて、この問題に就いて有たれてゐる資料を瞥見するのは、興味あることである、一八七五年——一八七八年間に於ける蒸汽動力數を報じてゐるのは、『ロシア帝國の蒸汽動力統計用材料』(サンクト・ペテルブルグ、一八八二年、中央統計委員會發行。)である。(註、十三部類の製造業の中から、一八九二年と比較する爲に、左の部類を、即ち一(農業)、十二(印刷業と石版刷業)十三(水道及びその他)を除くこととする、蒸汽運轉車は、蒸汽機械と一緒に數へる。)なほ一八九二年度の爲に、吾人は凡ての製造所工場と鑛山業とを網羅する數字『工場制工業に關する資料

集』を有つてゐる。左にこれ等の資料を比較する。

工業に於ける蒸汽動力數

帝國内總數	一八七五年—一八七八年			一八九二年		
	蒸汽々罐	蒸汽機械	その蒸汽力	蒸汽々罐	蒸汽機械	その蒸汽力
歐露(五十縣)	七、三四	五、四〇	九八、八七八	一一、二七二	一〇、四五八	二五八、四六九
ポーランド	一、〇七一	七、八七	一四、四八〇	二、三三八	一、九七八	八二、三四六
カフカズ	一二五	五	五八三	五四	五四	五、二八三
シベリアとトゥルケスタン	一〇〇	七五	一、〇六	一三四	一三五	二、一一一
帝國内總數	八、五〇	六、三三	一四、九八七	一四、二四八	一三、〇八五	三四五、二〇九

十七年間に蒸汽動力數は、蒸汽力から云ふと、ロシアに於て三倍に、歐露に於て二倍半に増加したが、蒸汽機械數は、餘り多く増加しなかつた。それ故一臺の蒸汽機械の平均力は、著し

く高まつた。即ち歐露では一千八百蒸気力から二千蒸気力迄に、ポーランド王國では、一千八百蒸気力から四千百蒸気力迄に高まつた。従つて大機械精工業は、この期間に於て極めて迅速に發達したのである。蒸気力によると、一八七五年——一八七八年には、左の諸縣が他の諸縣より進んでゐた。即ちペテルブルグ縣（一七、八〇八蒸気力）モスクワ縣（一三、六六八蒸気力）キエフ縣（八、三六三蒸気力）ペルミ縣（七、三四八蒸気力）ウラヂーミル縣（五、六八四蒸気力）で——これ等の五縣を合すると、五八、三五一蒸気力となり、歐露に於ける總數の約五分の三に當る——次にはポドリスク縣が（五、四八〇）ペトロコフ縣が（五、〇七一）ワルシャワ縣が（四、七六〇）である。所が、一八九二年には、この順序は變つて、ペトロコフ縣（五、九〇六）三）ペテルブルグ縣（四三、九六一）エカテリノスラフ縣（二七、八三九）、モスクワ縣（二四、七〇四）、ウラヂーミル縣（一五、八五七）キエフ縣（一四、二二一）となり——最後の五縣に於ける蒸気力は、一二六、五七二、即ち歐露に於ける總數の殆んど二分の一に相當するやうになつた——次にはワルシャワ縣（一一、三二〇）及びペルミ縣（一一、二四五）である。これ等の數字は、二つの新粗工業中心地が形造られたことを明示してゐる。即ち一はポーランドで、

他は南露である。ペトロコフ縣では、蒸汽力の數は、一一、六倍に生長した。エカテリノスラフ縣とドン縣とを合すると、(註。一八七八年以後この兩縣の境界が變更されたので、吾人は兩縣を合するのである。)二、八三四から三〇、九三二に、即ち一〇、九倍に生長した。斯く迅速に生長したこれ等の精工業中心地は、後の場處から前の場所へ移動し、舊工業中心地を壓迫した。特に注意を惹くのは、これ等の資料に於て、生産需用品を作る工業、即ち鑛山業と金屬工業との特に迅速な生長が現はれてゐる點である。一八七五年——一八七八年には、この工業に於て、一、〇四〇の蒸汽機械と二二、九六六の馬力とが、(歐露に於て)需用されたが、一八九〇年には、一、九六〇の蒸汽機械と七四、二〇四の馬力とが需用された。即ち十四年間に於ける増加は、十六年間に於ける全工業の蒸汽動力總數の増加以上で、生産材料を作る工業は、全工業中に於て益々大きい部分を占めるに至つたのである。(註。一八九二年以後のロシヤに於て、蒸汽動力の應用が如何に進歩したかと云ふことは、次の事實によつても分る。即ち一九〇四年には、工場監督者等の調査によると、六四縣に於て製造所工場用蒸汽々罐が二七、五七九、農業用のものを除き、全部で三一、八八七の汽罐を算へた。(第二版の註。))

## 七 大工場の生長

我國の製造所工場統計資料の前記の如き不確實は、ロシアに於ける大機械精工業が、改革以後如何に發達したかを決定する爲に、吾人をして更に複雑な計算に走らしめた。吾人は最大の工場に關する、即ち作業場内に百人またはそれ以上の労働者を有する大工場に關する一八六六年、一八七九年、一八九〇年並に一八九四年——一八九五年度の資料を選択した。(註。資料の出所。『大藏省年報』一、(七一の製造業だけの資料。)(『工場案内』第一版及び第三版——凡ての製造業に就いての資料。『一覽表』に於ても同様。然し『一覽表』と『工場案内』との資料を比較するには、『工場案内』中に入つてゐる製造業の中からレール製造業を除かなければならぬ。製造所工場労働數の中に家庭労働者をも加へるやうな作業場は、除かれてゐた。時としてはこの家庭労働の除外は、前記の出版物の註の中に直接に述べられてゐることもある。また時としては、この除外は、種々な年度の資料を對立させることから明白になることもある。例へば、サラトフ縣綿織物業に關する一八七九年、一八九〇年及び一八九四年——一八九五年度の

資料に比較。(第六章、第二節の一に比較。)—Sinzheimer (『Ueber die Grenzen der Weiterbildung des fabrikmässigen Grossbetriebes in Deutschland,』Stuttg. 1893) (譯者註。シンツハイマー著『ドイツに於ける機械大企業發展の界限に就いて』は、五〇人及びそれ以上の労働者を有する大工場的企業に屬してゐる。この標準は、決して低いとは思はれない。然しロシアの資料を精算することの困難な爲に、たゞ大工場だけに制限されることとなつたのである。) 工場外労働者は、一八九四年—一八九五年度の『一覽表』の資料に於てのみ嚴重に分離されてゐる。それ故前年度の(殊に一八六六年及び一八七九年の)資料が、註に於て述べたやうに訂正されたにも拘らず、矢張り幾分誇張されたまゝになつてゐるのは、あり得ることである。

これ等の大工場に關する調査報告を引用して置く。(次の頁参照)

一八六六年—一八七九年—一八九〇年度の資料から成るこの表の解剖を始める。大工場の總數は、この數十年間に次の如くに變つた。即ち六四四—八五二—九五—若くは%にすると、一〇〇—一三二—一四七に變つた。それ故に二四年間に大工場數は、殆んど一倍半も増加した譯である。のみならず、若し大工場の各部類に就いての資料を採るならば、工場が



歐露に於ける最大工場 (左の年度の)

労働者数によ る工場類別	A 九の労働者有 するもの 五〇〇— 九の労働者有 するもの 一〇〇— それ以上の労働 者有するもの 合計*			B 九の労働者有 するもの 五〇〇— 九の労働者有 するもの 一〇〇— それ以上の労働 者有するもの 合計*			C 九の労働者有 するもの 五〇〇— 九の労働者有 するもの 一〇〇— それ以上の労働 者有するもの 合計*		
	工場数	總 の 有 する もの 数	數	工場数	總 の 有 する もの 数	數	工場数	總 の 有 する もの 数	數
労働者數によ る工場類別	一八六六年	五三 二〇四	一〇九,〇六一	九〇	六	九,八七七	六四 三五四	一四,七三七	一〇一,五四一
	一八七九年	六四 三〇七	三三,七九九	二四 三五	二五,八〇一	二〇一,〇六六	八五 五四九	一五,七〇〇	一四,九四五
總 の 有 する もの 数	一八六六年	五三 二〇四	一〇九,〇六一	九〇	六	九,八七七	六四 三五四	一四,七三七	一〇一,五四一
	一八七九年	六四 三〇七	三三,七九九	二四 三五	二五,八〇一	二〇一,〇六六	八五 五四九	一五,七〇〇	一四,九四五
労働者數	一八六六年	五三 二〇四	一〇九,〇六一	九〇	六	九,八七七	六四 三五四	一四,七三七	一〇一,五四一
	一八七九年	六四 三〇七	三三,七九九	二四 三五	二五,八〇一	二〇一,〇六六	八五 五四九	一五,七〇〇	一四,九四五
生産 額 千 位 單	一八六六年	五三 二〇四	一〇九,〇六一	九〇	六	九,八七七	六四 三五四	一四,七三七	一〇一,五四一
	一八七九年	六四 三〇七	三三,七九九	二四 三五	二五,八〇一	二〇一,〇六六	八五 五四九	一五,七〇〇	一四,九四五
總 の 有 する もの 数	一八六六年	五三 二〇四	一〇九,〇六一	九〇	六	九,八七七	六四 三五四	一四,七三七	一〇一,五四一
	一八七九年	六四 三〇七	三三,七九九	二四 三五	二五,八〇一	二〇一,〇六六	八五 五四九	一五,七〇〇	一四,九四五
労働者數	一八六六年	五三 二〇四	一〇九,〇六一	九〇	六	九,八七七	六四 三五四	一四,七三七	一〇一,五四一
	一八七九年	六四 三〇七	三三,七九九	二四 三五	二五,八〇一	二〇一,〇六六	八五 五四九	一五,七〇〇	一四,九四五
生産 額 千 位 單	一八六六年	五三 二〇四	一〇九,〇六一	九〇	六	九,八七七	六四 三五四	一四,七三七	一〇一,五四一
	一八七九年	六四 三〇七	三三,七九九	二四 三五	二五,八〇一	二〇一,〇六六	八五 五四九	一五,七〇〇	一四,九四五



大きければ大きいだけ、それだけより速くその数が増加するのを見る。(A、工場五二二——六四一——七二二。B、九〇——一三〇——一四〇。C、四二——八一——九九)。これは製造業の集中が盛んになりつゝあることを示すものである。

機械を有する作業場の数は、工場の總數より迅速に生長しつゝある。即ち%にすると、一〇〇——一七八——二二六となる。大作業場の数は、益々多く蒸汽動力の使用に移りつゝある。

工場が大きいだけ、それだけより多くその中に機械附作業場がある。これ等の作業場の割合を、此處に挙げた部類の工場總數に加へると、次の如き數字を得る。即ちA、三九%——五三%——六三%、B、七五%——九一%——一〇〇%、——C、八三%——九四%——一〇〇%。蒸汽動力の應用は、製造業の規模擴張と、製造業に於ける協業の擴張とに密接な關係を有してゐる。

凡ての大工場に於ける労働者數は、一〇〇——一六八——二〇〇と云ふやうな%に變つた。二四年間に労働者數は二倍になつた。即ち『製造所工場労働者』の總數の増加を決定した。一つの大工場に對する労働者の平均數は、年別にすると、三五九——四五八——四八八人であり、部類別にすると、A、二二三——二二二——二二〇、B、六六五——七〇六——六七三、C、

一、四九五——一、九三五——二、一五四であつた。それ故に最大の工場は、労働者の大部分を集めつゝある。

一、〇〇〇人またはそれ以上の労働者を有する工場は、一八六六年には大工場に於ける労働者總數の二七%を、一八七九年には四〇%を、一八九〇年には四六%を占めてゐた。

凡ての大工場の生産額の變化は、一〇〇——二四三——二九二の%で現はれ、部類別にする  
と、A、一〇〇——二〇一——一八七、B、一〇〇——二四五——三〇八、C、一〇〇——三  
二〇——四七七となる。それ故に凡ての大製造所の生産額は、殆んど三倍に増加した譯である、  
のみならず、工場が大きいだけそれだけ迅速にこの生長も行はれた。然しながら若し吾人が年  
々の労働生産力を各部類別に比較すると、幾分異つた現象を見る。凡ての大工場に於ける一勞  
働者に割當てられる平均生産額は、八六六留——一、二五〇留——一、二六〇留となり、部類  
別によると、A、九〇一留——一、四一〇留——一、一九一留、B、八〇〇留——一、二八二留  
一、五七四留、C、八四一留——一、〇八二留——一、一八八留となる。それ故に（一労働者  
に割當てられる）生産額が、低い部類から高い部類へ増加するのは、毎年見られる譯ではない。

かうなる理由は、未製原料品の種々異つた價格により、それ故に一労働者に對する種々異つた年生産額により區別されてゐる種々な製造業に屬する工場が、不平均な關係に於て、各種の都類に入つてゐる點にある。(註。例へば、一八六六年度には、Aの部類に一七の棒砂糖製造所が入つてゐた。その製造所で一労働者に割當てられる年生産額は、約六千留である。然るに(高級部類に入つた)織物工場に於て一労働者に割當てられる年生産額は、五〇〇留——一、五〇〇留である。)

吾人は一八七九年——一八九〇年度の資料並に一八七九年——一八九〇年——一八九四年——一八九五年度の資料をこれまでのやうに詳細に分解研究することを餘計なことと認める。何故かと云へば、それはたゞ幾分異つた割合關係を端緒として、今迄述べたことを更に反復することになるからである。

最近に至つて『工場監督者報告集』に労働者數に據る製造所工場の部類別に就いての資料が挙げられてゐる。左に一九〇三年度のこの資料を掲げる。

工場制作業場の部類	ロシアの六四縣に於て		歐露の五〇縣に於て	
	作業場の數	労働者數	作業場の數	労働者數
労働者二〇人以内のもの	五、七四九	六三、六五二	四、五三三	五、七八
二一—五〇人のもの	五、〇六四	一五八、〇六二	四、二五三	一三四、一九四
五一—一〇〇人のもの	二、二七一	一五六、七八九	一、八九七	一三〇、六四二
一〇一—五〇〇人のもの	二、〇九五	四六三、三六六	一、七五五	三八三、〇〇〇
五〇一—一〇〇〇人のもの	四〇四	二七六、四八六	三四九	二四〇、四四〇
一〇〇〇以上のもの	二三八	五二、五一	二二〇	四五七、五三四
合計	一五、八三二	一、六四〇、四〇六	二二、九九七	一、三九七、五三六

これ等の資料は、これを前に挙げた資料と比較することが出来る。たゞその場合、或る程度の不正確を許さねばならぬ。然しその不正確は、一寸したものである。何れにしても、これ等

の資料は、（労働者九九人以上若くは一〇〇人以上）の大工場數と、これ等の工場に於ける労働者數とが、迅速に増加しつつあることを示すものである。またこれ等の大工場數の中の最大の工場に於ける労働者の——従つて生産の——集中も増加生長する譯である。

吾人は大工場に就いての資料と我國官邊の統計中に於ける全『製造所工場』に就いての資料とを對照させると、一八七九年に大工場が全『製造所工場』の四・四%を成し、製造所工場労働者總數の六六・八%をなし、そして全生産額の五四・八%を集中したのを見る。一八九〇年には、大工場は全『製造所工場』の六・七%を成し、製造所工場全労働者の七一・一%と全生産額の五七・二%とを集中してゐた。一八九四年——一八九五年には大工場は、全『製造所工場』の一〇・一%を成し、製造所工場全労働者の七四%と全生産額の七〇・八%とを集中してゐた。一九〇三年には一〇〇以上の労働者を有する大工場は、歐露に於て製造所工場總數の一七%を成し、製造所工場労働者總數の七六・六%を集中してゐた。（註。『工場案内』と『一覽表』による我國の工場制工業に關する總計的資料は、前の第二節に掲げた通りである。『人口調査書』二六七頁に比較）『製造所工場』總數に對する大工場數の割合關係の増加は、先づ第一に我國の統計に於

けるこの『製造所工場』なる概念が、次第に狭められつゝあることを示すものであると云ふ點に注目しなければならぬ。(一九〇三年度の調査報告は、本文中では第二版に於て増訂されてゐる。編輯者。斯く大工場は、即ち主として蒸汽機械附工場は、その數が極めて少ないにも拘らず、労働者數と全『製造所工場』の生産額との優越な、そして益々生長しつゝある部分を集中してゐるのである。なほこれ等の改革以後の時代に於ける大工場が、如何に偉大な速力を以て生長しつゝあるかと云ふことは、吾人が既に瞥見した通りである。で、こん度は鑛山工業に於ける大企業に關する資料を掲げることとしよう。(註。資料は『一八九〇年度の鑛山工業に關する統計報告集』中にも擧げられてゐるのみならず、『工場案内』に入つてゐる製造所は、除去されてゐる。この除去の爲に、歐露に於ける鑛業労働者の總計は、三萬五千人だけ減少してゐる。

340,000—35,000=305,000))



歐露に於ける工業上の最大企業。一八九〇年

工場、製造所、鑛山炭坑及びその他の類別（労働者數による）	鑛山工業に於て		工場制工業並に鑛山工業に於て	
	企業數	労働者數	企業數	労働者數
A、労働者一〇〇—四九九を有するもの	二六	八九	一、三六九	三〇、九〇六
B、労働者五〇〇—九九九を有するもの	七	三八	二五	一七二、一六〇
C、労働者一、〇〇〇及びそれ以上を有するもの	七	四九	一八六	三九八、〇三五
合計	三〇	一七六	一、八二二	八八一、二〇〇

鑛山工業に於ける大企業労働者の集中は、一層甚だしい。（尤も、製造業に蒸汽動力を應用する企業の割合は低いが。）労働者三十萬五千人の中から二十五萬八千人は、即ち鑛山労働者の八四・五％は、百人またはそれ以上の労働者を有する企業に集中されてゐる。鑛山労働者の殆んど半數は、（三十萬五千人中十四萬五千人は）千人またはそれ以上宛の労働者を有する少數の最

大製造所に占領されてゐる。歐露の製造品工場労働者と鑛業労働者との總數（一八九〇年には五十七萬人）中の四分の三（七四・六％）は、百人またはそれ以上の労働者を有する企業に集中されてゐる。殆んど半數（百十八萬人中五十七萬人）は、五百人またはそれ以上宛の労働者を有する企業に集中されてゐる。（註。ドイツに於ける、一八九五年の工業登録は、ロシアでは登録されてゐないやうな鑛山建築工業を加へて、千人またはそれ以上の労働者を有する作業場二四八を算へてゐる。それ故にロシアの最大工場は、ドイツの工場より大きい譯である。（第一版に部分の代りに『ドイツには』と云ふ言葉で始まつて、終末まで讀んで行くと、『千人以上の労働者を有する一八五の企業——巨人が、プロシアにある。』と書いてある。これ等の企業中には三十二萬一千人の労働者が占領されてゐた。『ルースキヤ・ヴェードモスチ』紙、一八九七年。第三〇三號。編輯者。）」

此處でエヌ——オン氏の提起した問題に、即ち一八八〇年——一八九〇年の期間に於ける資本主義の發達と『工場民』の生長とが、一八六五年——一八八〇年の期間に比して『遅々としてゐる』と云ふ問題に觸れるのも、滿更餘計なことではあるまいと思ふ。（註。『ルースコエ。

ボガートストゥヴォ』一八九四年。第六號、一〇二頁以下。吾人の擧げた大工場に關する資料は、一八七九年——一八九〇年間の増加の割合が、一八六六年——一八七九年間に比較すると、遙かに少いと云ふことを證明してゐる。エヌ——オン氏はこの素晴らしい發見から出發して、氏独自の異彩ある論理により、狡猾にも『資本主義がその發達の或る境界に達すると、それ自身の内部的市場を縮小する』と云ふ『家内工業概観』に擧げた斷案を『事實が完全に立證してゐる』かの如く結論しようとした。——第一に、『増加が遅々としてゐる』と云ふ點から内部市場の縮小を結論することは、亂暴である。製造所工場労働者數が、住民より速かに増加してゐる（これはエヌ——オン氏自身の資料によるもさうである。即ち一八九〇年までは、二五％も増加してゐる。）と云ふことは、住民が農業から引離されつゝあることを、國內市場が、個人需用品の爲にさへ膨脹しつゝあることを意味するものである。（吾人は生産需用品の爲めの市場に就いてもう言ふまい。）第二に、割合に於て表現されてゐる『増加の減小』は、或る發達程度に達した資本主義國に於て必ず起る筈のものである。何故かと云へば、小さいものは、大きいものより割合に速く生長するからである。資本主義發達の初歩が、特に迅速に進行すると云ふ

事實から、若い國には、古い國を追ひ越さうとする大勢がより多いと云ふ結論を下すことも出来る。最初の期間に於ける膨脹の割合をその次の期間の標準とすることは、間違ひである。第三に、『増加の減小』と云ふ事實そのものは、エヌー——オン氏の採用した各時期の比較によつて決して證明されるものではない。資本主義的工業の發達は、必ず周期的に行はれるものである。従つて、種々異つた時期を比較するには、或る數年間の資本を取て見る必要がある。(例へば、ツীগン・バラノーフスキ氏は、その著書『工場』の三〇七頁とその圖解とに於てさうしてゐる。圖解によると、一八七九年、更に一八八〇年並に一八八一年は、特別勃興の年であつた。それは、特別な隆盛勃興の年と衰微の年とが判然と區別される爲である。エヌー——オン氏はそれをせずに、深い誤謬に陥つた。氏は一八八〇年が特別勃興の年であつたことに氣附かなかつたのである。のみならず、エヌー——オン氏は寧ろ反對の斷案を『組み立てること』さへ遠慮しなかつた。『更に注目しなければならぬ點は、中間的な(一八六五年と一八九〇年の間の)一八八〇年が豊年でなかつたことと、従つてこの年に登録された労働者數が、正常の數より少なかつたことである!』(同上。一〇三頁——一〇四頁)と彼は論じてゐる。エヌー——オン

氏は、一八八〇年度の數字を取つたその出版物（『工場案内』第三版）の原文に、一寸と一瞥を加へると——其處に一八八〇年の特長が、工業上の、特に皮革製造業と機械製造業上の『躍進』であつたこと、（四頁）並にこれが戦後製造品に對する需用の多くなつたのと政府の注文が殺倒したのことに起因することを讀むことが出来るに相違ない。この躍進の範圍を明瞭に思ひ浮べる爲には、一八七九年度の『工場案内』を繰つて見るだけで十分である。然しながらエヌ——オン氏は、そのロマンチックな理論の利益ならば、如何に事實を曲けても意としないのである。

## 八 大工業の配置

生産が最大の作業場に集中されるものであると云ふ問題以外に、大機械工業の特質を評價する所の更に重大な問題は、製造業が工場制工業の各中心地に集中されてゐると云ふ問題と、工場中心地の種々なる形態の問題とである。遺憾ながら、我國の製造所工場統計は不充分で、而も比較すべからざる材料を提供するのみならず、その材料の整理が甚だ杜撰である。例へば、現時

の出版物に於て、工業の配置は、たゞ各縣別に示されてゐるに過ぎない。(六十年代の立派な出版物に於ては、都市別及び市外地帯別に、工業の配置が示されてゐる。これ等の出版物は、圖面を以て工場制工業の配置を説明してゐる。)然しながら大工業の配置に關する正確な觀念を與へる爲には、各中心地別の資料を採用する必要がある。即ち各都市別に、工場村別に若くは互に近距離に配置されてゐる工場村集團別に資料を採用する必要がある。縣若くは市外地帯は——地域の單位としては餘りに大きい。(註。……『市外地帯(モスクワ縣)の地域別にする』と、製造所と工場との配置は、決して整然たるものではない。最も工業の發達した市外地帯には、工場的作業場が多く密集してゐる爲に、眞の工場中心地と名づけることの出来るやうな土地の外、凡ての工場制工業を殆んど有たない幾多の郡がある。その反對に、一般に製造所と工場との少ない市内地帯には、様々な營業が多少著しい程度に於て發達した地域がある。のみならず、家内工業家の百姓小舎と仕事場と並んでより大きい作業場と大製造業の凡ゆる屬性とが發生した地域がある。』(『モスクワ。縣統計報告集』衛生の部、第四卷、第一編。モスクワ。一八九〇年。一四一頁)この出版物は、現時の製造工場統計文献中の優れたもので、詳細に編

纂した圖面で、大工業の配置を説明してゐる。工場制工業の配置の完全な圖面の爲には、工場と労働者の數並に生産額による中心地類別だけでは不十分である。〕それ故に吾人は、一八七九年並に一八九〇年度の『工場案内』中から、我國の工場制工業が主要中心地に集中してゐることに關する資料を選び出すことを必要と認めた。附録（第三附録）に入つてゐる表の中に、歐露の一〇三の工場中心地に關する資料がある。その中心地は、製造所工場労働者總數の約半數を集中してゐる。（註。表の中に入つてゐるのは、二千留以上の生産額を有する作業場のみと、製粉所では蒸汽力による製粉所だけで、工場外労働者は、除かれてゐる。除かれてゐる處には、彼等が工場労働者中に加へられてゐることが示してある。斯の如き除外例は、\*印で示されてゐる。一八七九年に於ける工業の勃興は、これ等の資料の中にも現はれざるを得なかつた。〕

表はロシア内に於ける工場中心地の三つの主要タイプを吾人に示してゐる。即ち（一）は都市である。都市は第一の場處に立つてゐて、其處には最も多くの労働者と作業場とが集中されてゐる。この關係に於て特に優秀なのは、大都市である。一八九〇年には各首都は（その郊外を

も入れて)七萬宛の工場労働者を集中し、リガ市は一萬六千人、イワノヴォ・ヴォズネセンスク市は一萬五千人、ボゴロードスク市は一萬人の労働者を集中してゐた。その他の都市は、一萬人以下である。或る大都市に於ける製造工場労働者数の政府筋の調べ(一八九〇年にはオデッサ市の八千六百人、キエフ市の六千人、ドン河畔ロストフ市の五千七百人及び其他)を一見したゞけでも、これ等の數字が滑稽なほど少ないのを十分に納得することが出来る。先に掲げたペテルブルグ市の實例は、斯の如き中心地に於ける工業労働者の總數を得る爲にこれ等の數字を幾倍しなければならぬかと云ふことを示してゐる。都市と並んで指摘せねばならぬのは、郊外地帯である。大都市の郊外は、それ自體屢々著しい工業中心地となつてゐる。然しながら吾人の資料に依ると、斯の如きたゞ一つの中心地を——ペテルブルグの郊外を分離することが出来る。其處では、一八九〇年度に一萬八千九百人の労働者を數へてゐる。吾人の表に入つてゐるモスクワ市外地帯の或る村落も、矢張りそれ自體郊外をなしてゐるのである。

中心地の第二のタイプは——工場村である。この工場村は、モスクワ縣、ウラデーミル縣及びコストローム縣に特に多い。(吾人の表に入つてゐる六三の最も主要な工場村中心地總數中



の四二は、これ等の諸縣にあるものである。)これ等の中心地の頭になつてゐるのは、オレホーヴォ、ズーエヴォと云ふ土地である。(表にはオレホーヴォとズーエヴォとは別々に擧げられてゐるが、これは同一中心地である。)この土地は、労働者數から云ふと、たゞ首都だけに及ばない、(一八九〇年には、二萬六千八百人)(註。一八七九年には此處では僅かに一萬九百人を算した。明かに種々なる登録方法が應用されたものと見へる。)前記の三縣と、それからヤロスラフ及びヒトゥヴェーリ兩縣とに於て、工場村中心地の大多數は、最も大きい織物工場(綿絲紡績、木綿織工場、綿布織工場、毛織物工場及び其他)を形造つてゐる。以前はこれ等の村々には、殆んど必ず分配事務所があつた。即ち資本主義的粗工業の中心があつた。この中心は、地方に於ける多數の手織職人を支配してゐた。統計が家内労働者と工場労働者とを混同しないやうな場合には、これ等の中心地の發達に關する資料は、大機械精工業の生長と、この大機械精工業が數千の農民を返在から吸ひ集めて、これ等の農民を工場労働者に變化することを浮刻のやうに示してゐる。更に工場村中心地の大多數を形造つてゐるのは、工業上や金屬業上に於ける大製造所である。(ポプロヴォ村に於けるコロームンスキイ製造所やユゾーフスキイの製造所やブリヤン

スキイ製造所及びその他である。その中の大多數は、鑛山工業に屬するもので、従つて吾人の表の中には入つてゐない。西南諸縣の各村各地に散在してゐる甘菜製糖所の如きも矢張り相當に大きい工場村中心地を形造つてゐる。吾人は最大の中心地の中の一を——キエフ縣に於けるスメーラと云ふ土地を實例に採つた。

工場中心地の第三のタイプは——『家内工業』村である。この家内工業村に於ける最大作業場は、多く『製造所及び工場』に算へられてゐる。吾人の表の中に於て、斯の如き中心地の標本となつてゐるのは、バヴロヴォ村、ヴォルスマ村、ボゴロドスコエ村、ドゥーボフカ村等である。斯の如き中心地に於ける製造所工場労働者數とこの中心地の全營業民との比較は、既にボゴロドスコエ村に就いて行つた通りである。

吾人の表の中に入つてゐる全中心地を、各中心地に於ける労働者數により、また中心地の種類により（都市か村落かにより）類別すると、次の如き資料が得られる。

歐露に於ける工場制工業の主要中心地

労働者數並に中心地の種類による中心地の類別	一八七九年						一八九〇年												
	中心地の數		製造所及び工場		生産額		労働者數		中心地の數		製造所及び工場		生産額		労働者數				
	都市	村落	計	場	單位千留	者數	額	者數	都市	村落	計	場	單位千留	者數	額	者數			
一萬人又はそれ以上の労働者を有する中心地	四	一	五	一、三九三	二七九、三九八	一五八、六七〇	六	一	七	一、六四四	三六一、三七二	二〇六、八六二	一萬人又はそれ以上の労働者を有する中心地	四	一	五	一、三九三	二七九、三九八	一五八、六七〇
五千人乃至一萬人の労働者を有する中心地	六	一	六	一四二	六五、九七四	四九、三四〇	一〇	四	一四	九三二	一五一、〇二九	九〇、二二九	五千人乃至一萬人の労働者を有する中心地	六	一	六	一四二	六五、九七四	四九、三四〇
一千人乃至五千人の労働者を有する中心地	三	三	五	一、〇二九	一七四、一七一	一三三、七二二	一七	四	六五	八〇四	一八六、四三三	一四四、二五三	一千人乃至五千人の労働者を有する中心地	三	三	五	一、〇二九	一七四、一七一	一三三、七二二
一千人またはそれ以上の労働者を有する中心地の總計	三	三	五	二、五七〇	五二九、五四三	三四一、七二二	三三	五	八六	三、三七九	六九八、八三三	四四一、三四六	一千人またはそれ以上の労働者を有する中心地の總計	三	三	五	二、五七〇	五二九、五四三	三四一、七二二
一千人以下の労働者を有する中心地	八	二〇	二八	二六〇	一七、一四四	一四、〇五五	六	一〇	一六	二五九	八、一五九	九、八九八	一千人以下の労働者を有する中心地	八	二〇	二八	二六〇	一七、一四四	一四、〇五五
労働者なき中心地	一	五	五	一	—	—	一	—	一	—	—	—	労働者なき中心地	一	五	五	一	—	—
總計	四〇	六三	一〇三	二、八三二	五三六、六八七	三五五、七七七	四〇	六三	一〇三	三、六三八	七〇六、九八一	四五一、二四四	總計	四〇	六三	一〇三	二、八三二	五三六、六八七	三五五、七七七
都市(及び郊外)	四〇	—	四〇	二、五七四	四二一、三三〇	二五七、一八一	四〇	—	四〇	三、三二七	五三五、〇八〇	二九八、六五一	都市(及び郊外)	四〇	—	四〇	二、五七四	四二一、三三〇	二五七、一八一
村落(市外地及び場末)	—	六三	六三	二五七	一一五、三三七	九八、五九六	—	六三	六三	三二二	一七二、八九六	一五二、五九三	村落(市外地及び場末)	—	六三	六三	二五七	一一五、三三七	九八、五九六

この表によつても分る如く、一八七九年には一〇三の中心地に於て労働者が三十五萬六千人も集中され（總數十五萬二千人中から）、一八九〇年には四十五萬一千人（八十七萬六千人中から）も集中されてゐた。それ故に労働者數は、二六・八%も増加した譯である。然るに大工場（二〇〇人またはそれ以上の労働者を有する）に於ては、一般に僅かに二二・三%の増加を見たに過ぎない。製造所工場労働者の總數は、この間に一六・五%も増加した譯である。斯く最大中心地に於ては、労働者の吸収が行はれてゐる。一八七九年には、僅かに一一の中心地が五千人以上の労働者を有つてゐたに過ぎないが、一八九〇年には最早二一の中心地になつた。特に眼に附くのは、労働者五千人乃至一萬人を有する中心地の數が、増加したことである。かう云ふことが起つたのは、二つの原因による。それは、（一）南露（オデッサ市、ドン河畔のロストフ市及びその他）に於ける工場制工業が著しく生長したことと（二）中央諸縣に於ける工場村が生長したこととである。

都市中心地と村落中心地とを比較して見て、村落中心地が一八九〇年には主要中心地に於ける労働者總數の約三分の一（四十五萬一千人の中十五萬二千人）を網羅してゐることが分つた。

この關係は、ロシア全體にすると、もつと高くなる筈である。即ち製造所工場労働者の三分の一以上は、都市以外にゐた筈である。實際に有力な都市中心地は、悉く吾人の表の中に入つてゐる。然るに労働者數百人宛を有つてゐる村落中心地は、吾人の擧示した以外に非常に多い。

(硝子製造場、煉瓦製造所、酒釀造所、甘菜砂糖製造所及び其他を有する村は、非常に多い。)  
鑛業労働者も矢張り主に都市以外に住んでゐる。それ故に歐露の製造所工場労働者及び鑛業労働者總數中の半數以下は(或は半數以上は)都市以外に散在してゐるものと思ふことが出来る。

この結論は、重大な意義を有つてゐる。何故かと云へば、この結論は、ロシアに於ける精工業住民がその量に於て都市住民を遙かに超過してゐることを示すからである。(註。一八九七年一月二十八日の人口調査は、この結論を完全に證明した。帝國全體に於ける都市住民は、男女共一七、八二八、三九五人と算定され、商工業住民は、吾人が先に示した通り、二千百七十萬人と算定された。(第二版の註。))

都市中心地と村落中心地とに於ける工場制工業の發達が、比較的迅速であると云ふことに就いての問題に移ると、吾人は村落中心地の方がこの關係に於て絶對に進んでゐるのを見る。一、

〇〇〇人またはそれ以上の労働者を有する都市中心地の数は、舉示した期間には、極めて微々たる増加を示したに過ぎない。(三二二から三三三まで) 四〇の都市中心地に於ける労働者数は僅かに一六・一%だけ(二十五萬七千人から二十九萬九千人まで)増加したに過ぎないが、六三の村落中心地に於ては、五四・七%だけ(九萬八千五百人から十五萬二千五百人までに)増加した。都市の一中心地に對する労働者の平均數は、僅か六千四百人から七千五百人までに高まつたに過ぎないのに、村落の一中心地に對する労働者の平均數は、一千五百人から二千四百人にまで高まつてゐる。それ故に工場制工業は、一見した所では、都市以外に非常な力を以て擴まらうとする傾向を、即ち新工場中心地を造り、これを都市中心地よりも速く進歩發展させ、斯くして資本主義的大企業の世界から遮斷されたかのやうに見へる田舎の僻地の奥深くにまで入つて行かうとする傾向を有つてゐるかのやうである。この非常に重大な事情は、第一に大機械精工業が如何なる速力で社會經濟的關係を形造りつゝあるかを各人に示すものである。從來數世紀の間に組織されたものが、今や僅かに數十年間に實現されつゝあるのである。例へば、前章に舉げた『家内工業村』即ちボゴロードスコエ村、バヴロヴ村、キムラ村、ホテイーチ村、

ヴェリーコエ村及びその他の村の如き非農業中心地の形成を、數千の農村住民を一度に精工業部落に吸引する現代の工場を以て新中心地を形造らうとする過程に比較して見る必要がある。

(註。『クリヴォイ・ローグ市外地帯に於ける住民は、一八八七年から一八九五年までの間に六、〇〇〇人から一七、〇〇〇人に増加した。ドゥネープル會社の石材製造所に於ては、一、〇〇〇人から一八、〇〇〇人までに増加した。一八九二年頃にはまだ停車場の建築物だけしかなかつた。ドゥルヂコーフカ停車場附近には、今では六、〇〇〇人の住民が発生した。グダンツェーフスキイ製造所には、約三、五〇〇人の労働者がある。幾多の製造所が建てられたコンスタンチノーフカ停車場附近には、新移民地點が形造られてゐる。ユーゾフカには、二九、〇〇〇の人口を有する都市が形造られた。……ニヂネドネプローフカに於ては、エカテリノスラーフ附近の曠原砂地には、今では幾多の製造所が出来て、六、〇〇〇の人口を有する新移住地が形造られた。マリウーボリの製造所は、一〇、〇〇〇人の新移民を吸収しつつある。各炭坑には、移民中心地が形造られてゐる。』(『財政通報』一八九七年、第五〇號。)『ルースキヤ・ヴェードモスチ』(一八九七年十一月二十一日附第三二二號)の報導によれば、バフムート市外地帯自治會々議は、

人口一、〇〇〇人の商業村を市外地に、人口五、〇〇〇人の商業地を都市に改變するやうにとの請願をしてゐる。……『我國には、商業村や工場村の異例の生長が見られる。……純アメリカ流の速力で發生し、生長する小村は、既に全部で三〇を算へる。ヴォルインツェーヴォ村では、十一月初旬から大規模の金屬品製造所が開設される筈で、其處には二つの熔鑛爐が据えつけられてゐる。製造所は、鋼鐵製造所とレール製造所とに分れてゐる。このヴォルインツェーヴォ村には、五千人乃至六千人の住民を算する。彼等はまだ近頃まで殆んど無人の曠野のやうな處に居住してゐたのである。労働住民が流れ込んで來ると同時に、商人や職人や一般に小工業家等が押し寄せて來るのも見られる。彼等は労働住民に凡ゆる商品を容易に、そして迅速に賣り付けることが出來ると考へて來たのである。』社會的分業は、大衝動を受ける。經濟生活の必然的條件となるものは、從來の土着と蟄居の代りに住民の移動である。第二に、工場が田舎へ移轉することは、資本主義が農民の土地共有團の階級的蟄居から起つて來る障礙を打破し、この蟄居から自分の爲に利益を引出すことを示すものである。田舎に於ける工場設置は、少なからず不便を忍んでゐるが、その代り安い労働者によつて保證されてゐる。百姓を工場の中へ入れず



——工場が百姓に接近して行くのである。(註。『工場は安い職工を探し、それを故郷の田舎に見出す。工場は職工の後を追ふて行かねばならぬ。』(『ウラヂーミル縣の工業』第三卷六三頁))  
百姓は最も有利な雇傭者を自分の爲に探す完全な自由を(連帯保證と土地共有團脫退に對する壓迫により)有つてゐないが、雇傭者は實に巧みに最も安い労働者を探し出す。第三には、工場村中心地の大多數とその迅速なる生長とは、ロシアの工場が農民の大衆から遮斷されてゐるとか、農民に對する工場の勢力が薄弱であるとか云ふやうな説が、如何に根據のないものであるかと云ふことを示してゐる。で、寧ろその反對に、我國に於ける工場制工業の配置の特質は、工業の影響が極めて廣いことと、その影響が作業場の壁により決して制限されるものでないことを示してゐる。(註。エカテリノスラフ縣バフムートスキイ市外地帯に於ける鑛山工業が、土地の農業制度に影響を與へると云ふことに就いて先に引用した事實(第三章第四節)を想起する。——また特質的なのは、普通農民等が、工場による住民の『腐敗墮落』を訴へたことである。)然しながら他面我國の工場制工業の配置に關する前記の特質は、大機械精工業がこれに従事する住民に與へる優越な行爲を一時阻止する力とならぬ譯に行かない。工場は、僻地

に住む百姓を直ちに労働者に變化すると同時に、或る期間最も安く、發達程度が最も低く、その要求程度が最も少ない『手』を以て自分を保證することが出来るのである。然しながら斯の如き阻止は、勿論決して永續すべきものではない。その阻止は、大機械精工業の影響の現はれてゐる分野を、更に大きく擴張すると云ふ價で贖はれるのである。

## 九 林業と建築工業との發達

大機械精工業生長の必然的條件の一となつてゐるのは、（大機械精工業生長の最も特質的な同伴者となつてゐるのは、）燃料と建築材料とを提供する工業の發達と、建築工業の發達とである。先づ林業の方から始める。

森林伐採と自分自身需用の材木粗製とは、農民の昔からの仕事となつてゐる。この仕事は、殆んど何處でも農民の作業の一般圏内に入つてゐる。然しながら吾人の所謂林業と云ふのは單に販賣用の製材をすることである。改革以後の時代は、この工業の特別の生長により特質附けられてゐる。即ち材木に對する需用は、個人需用品としても、（都市の膨脹、田舎に於ける非農

業民の増加、農民解放の際に於ける農民の森林喪失）殊に生産需用品としても、迅速に生長した。商業、工業、都會生活、軍事、鐵道及びその他の發達は——これ等の悉くは、材木の需用を著しく増大した。それは人間が材木を要求したのではなく、資本がそれを要求したのである。例へば、工業諸縣に於ける薪の値段は、『一日毎ではなく、一時間毎に』高くなつた。即ち『最近五年間に（一八八一年までに）薪の値段は二倍以上になつた。』『材木の値段は、長足に高まり始めた。』（註。『ウラデーミル縣の工業』）コストローマ縣に於ては、『工場が薪を喰ふので、薪の値段は、七年間に倍に騰貴した。また木材商品の外國輸出も、一八五六年の五、九四七留から一八八一年の三〇、一五三留及び一八九四年の三九、二〇〇留までに高上した。即ち100:500:650 と云ふ比例で生長したのである。』（註。『生産力』。ロシアの對外貿易、二九頁。（一九〇二年の木材輸出——五千五百七十萬留、一九〇三年——六千六百三十萬留。第二版の註。）歐露に於ける内地水路によつて輸送された木材建築材料とは、一八六六年——一八六八年には、平均一年一億五千六百萬ブードであつたが、（註。『陸軍統計集』四八六——四八七頁）一八八八年——一八九〇年には、一年平均七億百萬ブードに達した。（註。『鐵道及び内地水路の統計的

概観』サンクト・ペテルブルグ、一八九三年、（交通省發行）四〇頁）即ち、輸送量は四倍以上に増加した譯である。鐵道では、一八八八年——一八九〇年には、平均二億九千萬プードを輸送したが、（註。同上。二六頁）一八六六年——一八六八年には、多分七千萬プード以内であつたらしい。（註。鐵道の全貨物の約五分の一に近い。『陸軍統計集』五一—頁、五一八—五一九頁）即ち六十年代に於ける木材商品の全輸送量は、約二億二千六百萬プードであつたが、一八八八年——一八九〇年には、九億九千萬プードとなり、四倍以上に増加した譯である。斯く改革以後の時代に林業が偉大な生長を遂げたことは、疑ふ餘地がない。

この林業は如何に組織されてゐるであらうか？純資本主義的組織である。企業家等は、土地所有者から材木を仕入れる。企業家と云ふのは、伐採、製材、搬出その他の爲に労働者を雇ふ『林業家』である。例へば、モスクワ縣に於て、自治會統計は、林業に従事する農民二萬五千人中林業家を僅かに三三七人だけ算へてゐる。（註。『モスクワ縣統計調査集』第七卷第一部第二編。我國では林業に於て、多く主人と労働者が嚴重に區別されてゐない。労働者をも矢張り林業家と名づけてゐる。シヴァートカ縣スロボードスキイ市外地帯に於ては、一二三人の林業家

を算へた。『小林業家等は、大部分大林業家の請負人となつてゐる。』大林業家は僅かに十人である。林業に従事する労働者は一八、八六五人で、その賃銀は、労働者一人に對し十九留五十哥宛である。エス・コロレンコ氏は、歐露全體に於て林業に従事してゐる農民が、二百萬人に達すると算へたが、この數は恐らく誇張されてゐるのではあるまいか。何故かと云へば、例へばヴァートカ縣の九市外地帯(一一の中に於けるが如き約五六、四二〇人の林業労働者を算へ、全コストローマ縣に於ては、約四萬七千人を算へたからである。森林の作業は、最も報酬の悪いものゝ中に屬してゐる。その衛生狀況の如きは、實に嫌惡すべきものである。労働者の健康は、どしどしと破壊される。森林の奥深く投げ込まれた労働者の境遇の如きは、全く孤立無援であつて、工場のこの範圍に於ても、奴役制度や、物品拂賃銀制度トラツクシステムなどの『家長的』農民營業の同伴者が、その全力を揮つてゐる。この特質批判を立證する爲に、地方の研究家等の意嚮を幾つか擧げることとする。モスクワの統計家等は、『食糧品を必ず通帳買にしなければならぬ』ことを指摘してゐる。これは林業労働者の賃銀を普通著しく低下するものである。コストローマの林業労働者は、『森林中に各組を作つて、粗末な掘立小舎の中に生活してゐる。小舎の

中には煖爐もなく、居爐裡の焚火で溫度を採つてゐる。食物は酷ひ物で、粗末な煮物と一週間に化石したやうな麵麩とで、空氣は不潔極まるもので……衣服の如き常に半ば濕つてゐる……これ等は皆林業家の健康に悲しむべき影響を與へずには置かない。』『林業を營む』諸郡に於ける人民は、『不潔な諸郡（即ち不潔な營業の盛んな諸郡）に於ける人民より遙かに汚ない』生活をしてゐる。ノヴゴーロド縣ティフヴィンスキイ市外地帯に就いては、斯う書いてある。『農業は、収入の根源としては、傍系である。尤も、凡ての政府筋の資料に於て諸君は人民が農業に従事してゐることを發見するだらうけれども……農民がその根本的な必要に對して得る所の凡ては、林業家の許で製材や材木搬出をやることによつて稼ぎ出すのである。然しながら程なく危機が來るに相違ない。即ち五年乃至十年も経つと、材木はもう無くなつて了ふだらう……林業に従事する者は、寧ろ宿無勞働者である。彼は林の中の掘立小舎の製材機械の上で冬を過す……が春になると、家内作業に慣れてゐない爲に、もう材木の搬出流送に走る。たゞ收穫期と刈入期にだけ、彼は已むなく土着民となる。』……農民等は林業家に『永久に經濟的に從屬してゐる。』（註。『家内工業研究委員會の調査』第八卷、一三七二頁、一四七四頁。『ティフヴィンスキ

イ市外地帯では、林業の要求のお蔭で、鍛冶業、皮革業、毛皮業及び一部分製靴業が發達した。鍛冶業は鳶口を提供し、皮革業以下のものは、靴や毛皮半外套や手袋などを提供する。』殊に吾人は此處に生産材料の製造（即ち資本主義的經濟に於ける第一部類の生長）が、需用品製造（即ち第二部類）に衝動を與へるものであると云ふことの實例を見るものである。生産が需用の後に随つて行くのではなくして、需用が生産の後に随つて行くのである。』ヴァーツカの研究家等は、林業作業の爲の雇傭が普通徴稅時期に行はれる、經營主から生活用品を借りることは、甚だしく賃銀を低下するものであるなどと言つてゐる。……『材木伐採者も薪伐採者も、夏期一日約十七哥、馬を有つてゐる者で一日約三十三哥ばかり貰つてゐる。斯の如き些少の支拂は——若しこの營業が極めて非衛生的な情況の下に行はれてゐると云ふことを想つたゞけでも、不十分な勞働報酬である云々』註。『家内工業研究委員會の調査』第十二卷、三九九——四〇〇、四〇五、四四八頁？。オルロフ縣トゥルブチェフスキイ市外地帯に就いての自治會資料集であるが、それには『農業は第二義的意味を有つてゐる。』主なる役目は營業に、特に林業にあると云ふことが到る處に指摘されてゐる。『トゥルブチェフスキイ郡に就いての統計報告集』オリョール市、

一八八七年。)

それ故に林業労働者等は、それ自體農村プロレタリアートの大なる構成分子の一を成してゐる。このプロレタリアートは、些細な土地の一隅を有ち、その労働力を最も不利なる條件の下に賣ることを餘儀なくされてゐる。この仕事は、極めて正しからざるもので、非恒久的である。従つて林業労働者等は、豫備軍の（若くは資本主義的社會に於ける相對的な移民の）一形態を形造つてゐる。理論はこの形態を隠されたる形態と名づけてゐる。（註。『資本論』1,5,668）即ち農村住民の或る部分は、（而も吾人が既に瞥見した通り、少なからざる部分は、）常に斯の如き仕事に取りかゝるつもりでゐなければならぬ。斯の如き仕事に常に使はれなければならぬ。これは、資本主義の存在と發達との條件である。林業家の強奪的經濟の下に於て、森林が絶滅されて行くに従つて、（所が、この過程は、非常な速力で進んでゐる。）——薪の代りに石炭を用ふることの必要が、益々痛感されて來る。炭坑業は、益々迅速に發達して來る。この炭坑業一つだけは、大機械精工業に取つての堅固な根據地となり得る。必要な時期に、必要な量を一定の、そして餘り動搖せぬ値段で獲られるやうな安價な燃料があると云ふこと——これ



が現代工場の要求である。林業はこの要求を満す能力を有つてゐない。(註。この明瞭な説明は、『ポーランドの中央に於ける工場制工業研究委員會の報告』(サンクト・ペテルブルグ、一八八八年、第一編)の提供する資料中から得られる。ポーランドに於ける石炭は、モスクワに於けるものより二倍も安い。ポーランドに於て一ブードの紡績に對する燃料の費用は、一六哥——三七哥であるが、モスクワ地方に於ては、五十哥——七三哥である。モスクワ地方に於ける燃料の貯藏は、十二ヶ月——二十ヶ月を要するが、ポーランドに於ては、三ヶ月以上を要しない。大部分は、一ヶ月——四ヶ月で十分である。ニそれ故に燃料採取業に於て、炭坑業より林業が優勢であることは、資本主義状態の未發達から來るものである。製造業の社會的關係に就いて言へば、この關係に於て林業は、炭坑業に屬してゐる。それは資本主義的粗工業が、大機械精工業に屬してゐるのと略ぼ同様である。林業は、技術上から云ふと、最も幼稚な技術的狀態であつて、原始的方法を以て天然の富源を利用することである。所が、炭坑業に至つては、完全に技術の範圍に移り、廣い範圍に機械を使用せねばならぬ。林業は、生産者を農民のまゝにして置くが、炭坑業は、農民を工場労働者と化して了ふ。林業は、凡ての舊家長的生活組織

に殆んど全く手を觸れず、森林の奥深く投げ込まれた労働者等に最も甚だしい奴役制度を覆ひ被せ、彼等労働者の無智と無援と孤立とに乗じる。所が、炭坑業は、住民の動搖性を作り、大なる精工業中心地を作り、必然的に社會的生產監督を實現する。一言で盡せば、上述の如き兩者の交代は、粗工業と工場工業との交代の如く、進歩的意義を有つものである。(註。エヌ——オン氏は林業と炭坑業との交代問題に觸れると、『概観』二二二、二四三頁)例の通り、ひたすら自分の悲歎を述べ立てる。そして我がロマンチックは、資本主義的炭坑業の背後に、比較するものゝない程甚だしい搾取制度を有つてゐる資本主義的林業があると云ふ些細な事情を見まといと努力してゐる。その代り『労働者數』に就いて彼は誇張したことを言つた! 數百萬人の無職農民に比較すると、六十萬人のイギリスの炭坑夫が何であらうか?—と彼は言つてゐる。

(二二二頁)吾人はこれに對し、かう答へる。即ち資本主義により相對的住民關係が形造られたことは、疑ふ餘地がないが、エヌ——オン氏はこの現象と大機械精工業との關係を理解しなかつたのだと。假令一時的變則的であるにしても、様々な作業に従事してゐる農民の數を石炭の採掘にのみ従事してゐる専門家——坑夫の數と比較することは、全く無意味な方法である。エ

ヌ——オン氏が斯の如き方法を用ゆるのは、ロシアに於て工場労働者と鑛山労働者とそれから一般に商工業住民との數が、迅速に生長してゐる事實が、氏の理論を破壊するものであると云ふことを滅却する爲に外ならない。

建築事業も矢張り最初は確かに農民の家庭的作業範圍に入つてゐたし——今もなほ半自然な農民經濟が保存されてゐる程度に於て入り續けてゐる。この建築業が、將來發達し行くに従つて、建築労働者等は、需要者の注文に應じて働く所の専門家なる職人に變化するやうになる。大きな村や餘り大きくない都市に於て、建築工業の斯の如き組織は、現在も著しく發達しつつある。職人は、普通土地との關係を保ち、極めて狭い範圍に於て小需用者の爲に働いてゐる。所が、資本主義が發達するに従つて、この工業組織の保存は、不可能となる。商業、工場、都市、鐵道等の生長は、全く別種の建築を要求するやうになる。さうした別種の建築は、その建築上から云つても、またその大ききから云つても、昔の家長時代の建物とは似てもつかない。新建築は、極めて多種多様の、而も高價な材料を要求する。極めて多種多様の専門を有する多數労働者の協業を要求する。またその落成の爲には、長い時日を要する。これ等の新建築の配置は、

住民の傳統的配置に全然一致してゐない。これ等の新建築は、大都市若くはその郊外に、人のまだ住んでゐない土地の鐵道沿線に建てられる。土地の職人は、出稼労働者に化す。この労働者を雇ふ者は、企業家——請負人である。この請負人は、次第に需用者と製造者との間に押し込まれ、本當の資本主義者となる。資本主義的經濟の躍進的發達、即ち長期間の沈滯時代と『建築熱』（今、一八九八年に經驗しつゝあるが如き）の旺盛な時期との交代は、建築事業に於ける資本主義的關係の擴張廣大に大なる刺戟を與へるものである。

これが、ロシアの經濟的文献の資料による前記工業の改革以後の進化である。（註。既に先にも一言したやうに、この進化を實證することは、困難である。何故かと云へば、我國の文献に於ては、建築労働者は一般に多くの場合『職人』と名付けられ、全く誤りながら雇傭労働者をもこの職人の部類に加へてゐるからである。西歐に於ける建築工業組織の斯の如き發達に就いては、例へば、ウエップ著、『英國労働組合運動史』を参照されたい。）この進化は分業の地域的區別に於て、特に浮刻のやうに現はれてゐる。即ちこの進化は、個々の廣い地域を形造ること に於て現はれてゐる。その地域に於ける労働住民は、種々な建築作業に専門化されてゐる。

(註。例へば、ヤロスラフ縣に於て煖爐師、漆喰工及び石工で評判なのは、ダニローフスキイ市外地帯である。のみならず、この市外地帯の各郡は、これ等の職業中の一職工を特に専門的に産出してゐる。塗師はヤロスラフ市外地帯のザ・ヴォルガ地域から特に多く出で、大工はモロークスキイ市外地帯の中部區域から多く出る。(『ヤロスラヴリ縣概観』第二部。ヤロスラヴリ市。一八九六年。一三五頁及び其他)かうした地域の専門化は、既に建築作業に對する大市場の組織を、それからこれに關連した資本主義的關係の組織を豫想させる。これを説明する爲に斯の如き一地域に關する資料を引用しよう。ウラヂーミル縣ポクローフスキイ市外地帯は、昔から大工で有名である。その大工は今世紀の初頭には、既に全住民の半數以上となつた。なほ改革以後もその大工業は益々盛大になり續けてゐる。(註。五十年代の終りには、アルゲン地域から(アルゲン郡は、營業中心地である。)約一萬人の大工を出した。六十年代には、ポクローフスキイ市外地帯に於ける五四八ヶ村の中五〇三ヶ村までは、大工業に従事してゐた。(『ウラヂーミル縣の工業』第五の一六一頁)『大工業地帯に於て、斯の如き仲介者及び工場所有者の要素となつてゐるのは、請負人である。』この請負人は、大工組合員中の最も敏捷な者から出

て來るのが普通である。『請負人が十年間に五萬留乃至六萬留の金や更に多くの純利益を儲けたと云ふやうな話は、珍らしくない。或る請負師の如き、三〇〇——五〇〇人の大工を有つてゐて、既に本當の資本主義者になつてゐる。……』この地の農民等が、『大工商買くらる儲かるものはない』と言つてゐるのも無理ではない。所が、現今に於けるこの營業組織の特質的眞髓そのものを浮刻のやうに示すことは、困難である！『大工業は、この地の農民生活の全組織に深い印刻を捺した……農民なる大工は、次第に農業を忘れ、遂には全然それを放棄して了ふ。』都市に於ける生活は、大工に文化の印刻を捺した。即ち大工はその地方の農民より遙かに比較にならぬ程清潔な生活をし、その『智識の進んでゐること』と『その智的發達程度が比較的高いこと』とで、判然農民と區別されてゐる。

歐露に於ける建築労働者の總數は、有たれてゐる斷片的な資料によつて判斷しても、極めて多數でなければならぬ筈である。カルガ縣に於て、建築労働者は、一八九六年には土地の者と出稼中の者とを合して三九、八六〇人を算した。ヤロスラフ縣では、一八九四年——一八九五年に、政府筋の資料によると、出稼中の者二〇、一七〇人を算した。コストローマ縣では、出

稼中の者約三萬九千五百人を算した。ヴァートカ縣の九市外地帯（一一の中）では、出稼中の者約三萬五百人（八十年代に）を算した。トヴェーリ縣の四市外地帯（一二の中）では、土地の者と出稼中の者とを合して、一五、五八五人を算した。ニゼゴード縣ゴルバトーフ市外地帯では、土地の者と出稼中の者とを合して、二、二二一人を算した。リヤザン縣からは、一八七五年——一八七六年の政府筋の資料によると、たゞ大工だけでも一年二萬人以上を出した。オルロフ縣オルロフ市外地帯では、二千人の建築労働者を出した。ポルタワ縣の三市外地帯（一五の中）では、一、四四〇人を算した。サマラ縣ニコラエフスキ市外地帯では、一、三三九人を算した。（註。資料の出所は、前記の註に於て示したものゝ外に、自治會資料集を採用した。ヴェ・ヴェ氏は『家内工業概観』六一頁）ポルタワ縣、クールスク縣及びタムボプ縣に於ける一三の市外地帯に關する資料を擧げてゐる。建築労働者は、（ヴェ・ヴェ氏が彼等を皆『小工業家』に入れてゐるのは、誤りである。）全部で二八、六四四人で、市外地帯の丁年以上の全男子の二、七パーセントから二二・一パーセント迄である。假に平均パーセント（八・八パーセント）を標準とすれば、歐露には  $1\frac{1}{3}$  百萬人の建築労働者がなければならぬ筈である。（丁年以上の

男子を千五百萬人と算へて。所が前記の諸縣は、建築業の最も發達した諸縣と最も發達しない諸縣との中間に位するものである。これ等の數字によつて判斷すると、歐露に於ける建築労働者數は、一、百萬人以上に達する筈である。(註。一八九七年一月二十八日の人口調査書は、『資料總計集』一九〇五年。)全帝國內に於て建築工業に従事する獨立せる住民(自から生活費を獲る者)を七十一萬七千人と算し、傍らこの工業に従事する農業家四十六萬九千人をこれに加へてゐる。(第二版の註)この數字は、寧ろ最低のものとして認めなければならぬ。何故かと云へば、凡ての資料の出所は、建築労働者數が改革以後の時代に於て迅速に増加しつつあることを證明してゐるからである。(註。火災保險を受け得る建築物の價格に關する資料は、一部分建築工業の範圍を判斷する材料となり得る。一八八四年には、この保險價格は、五百九十六萬八千留であつたが、一八九三年には、七百八十五萬四千留となつた。(『生産力』第十二、六五頁)これは年々十八萬八千留も増加してゐる。建築労働者それ自體は、形造られて來た工業プロレタリアートを成してゐる。この工業プロレタリアートと土地との關係は、現在では既に非常に薄弱になつて來た。(註。例へば、ヤロスラフ縣に於ては、全住民の一——二〇パーセントは



即ち男子労働者の三〇——五六パーセントは、農業を脱し、脱した者の六八・七パーセントは、一年ぢう土地にゐない。〔ヤロスラーフ縣概観〕而も彼等を矢張り『農民と呼んでゐるのは。公の名稱に過ぎない』ことは明白である。(一一七頁) またこの關係は、年々益々薄弱になりつゝある。

建築労働者は、その境遇から云ふと、林業労働者と截然と異つてゐる。彼等は寧ろ工場労働者に近い。彼等は大都市に於て、即ち大工業の中心地に於て働いてゐる。これ等の中心地は、吾人が既に述べたやうに、著しく彼等の文化的程度を高める。若し衰微して來た林業が、まだ家長的生活組織と提携してゐる資本主義の餘り發達しない形態に於ける特質を現はすものであるとするならば、發達しつゝある建築工業は、資本主義の高い階程の特質を現はし、工業労働者の新階級を形造らしめ、舊い農民社會の深刻な瓦壞の前兆となるものである。

## 十 工場の附帶物

吾人が工場の附帶物と名づけるものは、雇傭労働と小工業との或る形態である。この形態の

存在は、工場と直接關係してゐる。この形態に屬するものは、先づ（或る部分に於て）林業労働者と建築労働者とである。これ等の労働者は、吾人が既に述べた通り、時としては直接工場中心地の工業住民中に入つてゐることもあれば、また時としては、附近の村々の住民に屬してゐることもある。（註。例へば、リャザン縣では、『一フルドーフスキイ工場の爲に』（一八八四年——一八八五年には、労働者四、八四九人、生産額六百萬留）『一冬薪の搬出に従ふ馬匹は、七、〇〇〇頭に達し、その大部分は、エゴリエーフスキイ市外地帯に於ける農民等の所有である。』（『家内工業研究委員會の調査』第七部、一一一〇頁））更にこの形態に屬するものは、時としては工場所有者自身の採掘する泥炭々田に働いてゐる労働者、（註。泥炭採掘業の統計もまた極めて混沌たるものである。この泥炭採掘業は、普通工場制製造業に屬してゐない（コレビヤーツキイ『調査書』一五頁）が、時としてはこれに屬してゐることもある。例へば、『一覽表』は、ヴラデーミル縣に於て、泥炭は他の諸縣に於ても獲られるけれども、たゞこの一縣だけに於て、二〇一人の労働者を有する一一の採掘地を算へてゐる。スヴィールスキイによると、『ウラヂーミル縣による製造所及び工場』一八九〇年にウラヂーミル縣に於ける泥炭採取に従

事してゐた者は、六、〇三八人であつた。で、ロシアに於て泥炭採取に従事してゐる労働者數は、全部で更に數倍多い筈である。)荷馬車屋、荷役人夫、商品荷造人夫及び一般に所謂黑色労働者などである。彼等は常に工場中心地住民の少なからざる部分を成してゐる。例へば、ペテルブルグに於て、一八九〇年十二月十五日の人口調査は、『日雇人足』『黑色労働者』の組に四四、八一四人(男女共)を登録し、次に運送業に五萬一千人(男女共)を登録した。その中九千五百人は、専門に重い荷物の輸送や積卸に從來してゐる。次に工場に取つての或る補助的作業は、『獨立せる』小工業家等によつて行はれる。工場中心地若くはその附近に於ては、バター製造所及び酒釀造所用の樽製造や、硝子器具を入れる籠編や、鯨又は、錠前を包装する爲の箱製作や、大工道具及び錠前用品の爲の型木製作や、製靴作業場用の鋏製造や、皮革製造所用の『櫛の棒』製作や、工場生産品包装用蕤編や、(コストローマ縣及び他の諸縣に於ける。)燐寸用の『藁稈』製造や、(リャザン縣カールガ縣及び其他の諸縣に於ける)煙草工場用の紙箱粘り附や、(ペテルブルク附近に於ける)酢製造所用の木粉製造や、大工場の要求の結果發達した小紡績工場(ロツヂ市に於ける)に於ける不用紡績絲製造などのやうな營業が、次第に現はれて來る。これ等の

小工業家等は、何れも丁度前記の雇傭労働者の如く、或は工場中心地の工業住民に屬してゐるか、或は附近の村落の半農住民に屬してゐるからである。更に工場は半製品の製造に制限されてゐる場合、時としては小營業を活かして置くことがある。これ等の小營業は、更に半製品の仕上げに従事する。例へば、機械的紡績絲製造業は、家内工業の織物業に刺激を與へた。製鐵所の周圍には、金屬製品及びその他を造る『家内工業家等』が現はれて來る。最後に、資本主義的家内作業は、屢々工場の附帶物となることがある。(註。吾人は『一覽表』によつて、一六の工場を算へた。これ等の工場は何れも、作業場内に千人またはそれ以上の労働者を有つてゐる。作業場は更に工場外に七、八五七人の労働者を有つてゐる。五〇〇人—九九九人の労働者を有する工場は、一四で、その有する工場外労働者は、一、二五二人である。『一覽表』が工場外作業を登録したのは偶然で、無數の白紙を含んでゐる。(工場監督者調査報告集は、一九〇三年度には、六三二の分配事務所と六五、一一五人の労働者とを算へてゐる。これ等の資料は勿論完全なものではないが、それにしても特質的なのは、これ等の事務所の大多數とこの事務所に屬する労働者の大多數とが、工場制工業の中心地に入つてゐることである。(モスクワ地方で

は、事務所五〇三、労働者四九、三四五人。サラトフ縣では、——サルピンカ（譯者註、更紗の一種）製造では——事務所三三三、労働者一〇、〇〇〇人）第二版の註。）大機械精工工業時代は、何處の國でも、製菓業の如き工業部門に於て、資本主義的家内作業が、廣い範圍に發達すると云ふ特質を有つてゐる。ロシアに於て斯の如き作業が何のくらの普及してゐるか、如何なる條件を有つてゐるか、粗工業の章にこの作業のことを書くのが、吾人には何故により多く正しいものと思はれるか、と云ふことは、吾人が既に述べた通りである。

工場の附帶物に就いて、幾分でも完全に書かうとすれば、完全な住民の職業統計が必要である。或は工場中心地とその附近との全經濟生活の輪郭的記録が必要である。然しながら吾人の満足せねばならぬ斷片的資料は、工場制工業が他の種類の工業から分離され、工場住民が工場の壁の中で仕事をしない住民から分離されつゝあると云ふ吾人の間に普及された意見が、如何に正しくないかと云ふことを示してゐる。要するに凡ての社會的關係と同様に、工業形態の發達は、幾多の錯綜した過渡的形態と過去への還元の如く思はれる現象との中に於て、極めて徐々に起つて來るものである。例へば、小營業の生長は、（吾人が既に瞥見した通り）資本主義的

粗工業の進歩を表示することが出来る。今になつて吾人の覺つたことであるが、工場は時として小營業を發達せしめ得るものである。『買占人』の爲の作業もまた粗工業と工場との附帶物となる。而して斯の如き現象の意義を正しく評價する爲には、この現象を或る發達階程に於ける工業の全組織と、それからこの發達の根本的傾向とに結びつける必要がある。

## 十一 工業と農業との完全な分離

工業と農業との完全な分離を行ふものは、たゞ大機械精工業のみである。ロシアの資料は、完全にこの斷案を立證してゐる。この斷案は、『資本論』の著者が他國の爲に下したものであるが、(註。『資本論』一の二、七七九頁——七八〇頁)然し經濟派——民衆派は、普通これを無視してゐる。エヌ——オン氏の如きもその『概観』に於て、機會ある毎に『工業と農業との分離』を論じてゐるが、確實な資料を基礎として、この過程が本來如何に進行してゐるか、この過程が如何に種々なる形態を呈するかと云ふやうなことに就いては、少しも考へ及んでゐない。ヴェ・ヴェ氏は土地と我國工業労働者との關係を(粗工業に於ける。我が著者は『資本論』の著者の

説に従つてゐるやうな風をするけれども、資本主義の個々の階程を區別する必要を認めてゐない！）指摘すると同時に、この問題に就いて『我國の（著者のイタリック體活字）資本主義製造業が』労働者——耕作者から『意氣地なくも（原文のまゝ）支配されてゐる』と云つて吹聴に及んでゐる。（『資本の運命』一一四頁及びその他）獨り『我が國に於て』のみならず、西歐の何れの國に於ても、大機械精工業前の資本主義が、労働者と土地との關係を全然引離して了ふことが出来なかつたと云ふことを、ヴェ・ヴェ氏は聞かなかつたらしいし、また若し聞いたにしても、忘れたのである！最後に、カブルコフ氏は、極く最近大學生等に次の如き驚くべき事實の曲解を捧げた。『西歐に於ては、工場労働は労働者にとつて唯一の生活の路となつてゐるが、我國では比較的僅かの例外を除いて、（原文のまゝ！）労働者は工場労働を副業と認め、より多く土地に引きつけられてゐる。』と。（註。『農業（原文のまゝ！）經濟講義』大學生用。モスクワ市、一八九七年、一二三頁。博學な統計學者は、凡ての場合に於ける八五％を（後の本文参照）『比較的僅かの例外』に屬せしめることが出来るとでも思つてゐるのであらうか？）

本問題の事實的研究を提供したのは、モスクワ衛生統計である。これは『工場労働者と農業

との關係』を示したデメンチェフ氏の勞作である。約二萬人の勞働者を網羅してゐる系統的に蒐集された資料は、工場勞働者中から農村勞働に行つた者が、全部で一四・一％であることを示した。然しながら更にもつと重大なことは、前記の勞作に於て極めて詳細に次の如き事實が證明されてゐることである。即ち機械的製造業は、勞働者を土地から引離すものであると云ふ事實である。これを立證する爲に引用された幾多の數字の中から、茲には次の如き最も明瞭なものを採用することとする。(註。『統計集』一、二九二頁。『工場』第二版、三六頁)

製造所及び工場

野良仕事へ  
行く割合

染色場を有する綿布手織工場

七二、五

絹織工場

六三、一

陶器磁器製造所

三一、〇

更紗模様染工場及び經絲分配事務所

三〇、七

羅紗製造所(完全製造)

二〇、四

手織業



木綿紡績自働木綿織工場

一三、八

更紗自働織工場及び染色仕上工場

六、二

機械製造所

二、七

機械織業

機械による更紗染色仕上工場

二、三

吾人は八製造業を手織業と機械織業とに分ち、これを以て著者の表を補足した。第九の製造業、羅紗織業に就いて云へば、羅紗織業は一部分は手織により、一部分は機械織によつて行はれてゐる。其處で、手織工場の織工中野良仕事に出て行く者は、約六三%であるが、自働織機を用ひて働いてゐる織工中には、一人も出て行く者はない。羅紗織工場の中でも機械力を用ひて働いてゐる部分の労働者中から出て行く者は、僅かに三・三%である。『それ故に、工場労働者をして土地との關係を斷たしめる最も主要なる原因は——手工生産が機械生産に移ることである。手工生産工場數は、比較的まだ相當に多いにも拘らず、これ等の工場に於ける労働者數は、機械生産工場に於て働く労働者數に比較すると、全く微々たるものである。その結果吾人

は野良仕事に出て行く労働者中一般に丁年以上の全労働者一四・一%、單に農民階級の丁年労働者一五%と云ふやうな僅かな割合を得るのである。で此處で言つて置くべきことは、モスクワ縣に於ける工場の衛生的研究資料が、次の如き數字を提供したことである。即ち機械的動力を有する工場は、全工場の二二・六%（その中一八・四%は、蒸汽動力を有するもの）で、其處に集中されてゐる労働者は、全労働者數の八〇・七%である。手工々場は、六九・二%で、その労働者は僅かに一六・二%に過ぎない。機械動力を有する二四四の工場に對し、労働者は九二、三〇二人（一工場に對し三七八人）であるが、七四七の手工々場に對しては、労働者は一八、五二〇人（一工場に對し二五人）に過ぎない。一作業場に平均四八八人またはそれ以上の労働者を有する最も大きく、そして大部分機械を据えつけた作業場にロシアの全工場労働者が如何に著しく集中されてゐるかと云ふことは、吾人が前にも述べた通りである。デメンチエフ氏は労働者の生れた場處や、土地の労働者と外來労働者との區別や、身分（町人と農民）の區別などが、土地との分離に如何なる影響を與へるものであるかを、詳細に研究した結果、これ等の區別が、悉く手工生産は機械生産に移るものであると云ふ根本的ファクターの影響の爲に消され

て了ふことを知つた。(註。ジバーノフ氏は、その著書『スモレンスク縣に於ける製造所及び工場の衛生的研究』(スモレンスク市發行。一八九四年—一八九六年)に於て、野良仕事に出て行く労働者數を、たゞヤールツェフの精工業一つの爲に略々一〇—一五%と算定した。(第二卷、三〇七、四四五頁。ヤールツェフの精工業に於て、一八九三年—一八九四年には、スモレンスク縣の製造所工場労働者八、八一〇人の中三、一〇六人と算へられてゐた。)この工場に於ける非常傭労働者は、男子が二八% (全工場で二九%)で、女子が一八・六% (全工場で二一%)。第二卷一六九頁参照)である。言つて置く必要のあるのは、非常傭労働者中に算へられてゐるのが、次の如き者であると云ふことである。(一)工場へ一年以内勤めた者、(二)夏期労働に出かける者、(三)『一般に何かの理由により、幾年間か製造所に働くことを中止してゐた者』(第二卷四四五頁)である。(四)『以前の耕作者が工場労働者に改造されることを如何なる原因が援けたとしても、これ等の専門労働者は、最初は存在してゐなかつた。彼等は農民として算へられてゐるが、それは、たゞ税金だけで村と結びつけられてゐるに過ぎない。この税金は、旅行券を書き換へる時に彼等が納入するものである。何故かと云へば、實際彼等は村に經營事業を有つてゐる

ないし、また誰も彼も普通家を賣り拂つて有つてゐないからである。彼等は土地に對する權利を所謂單なる法律的に保有してゐるだけである。一八八五年—一八八六年に於ける騒動は、多くの工場に於て、これ等の労働者が自から自分を村に關係のない者と思つてゐるばかりか、村の農民達の方も、自分達の同村人の子孫なる彼等を赤の他人なる外來者同様に見てゐることを示した。それ故に吾人はその眼前に既に形造られた労働者階級を見る。彼等労働者は、自分の屋根を有たない。實際に何の所有物をも有つてゐない。彼等は何物にも縛られぬ、その日々の生活をして行く階級である。而もこの階級は、昨日今日形造られたものではない。この階級は、既に工場労働者としての系圖を有し、この階級の小部分の如きは、三代も工場労働者を續けてゐる。(註。「統計集」一一九六頁。「工場」四六頁)最後に、工場と農業との分離に關する問題に就いては、最近の製造所工場統計が、興味ある材料を提供してゐる。「製造所工場一覽表」には、(一八九四年—一八九五年の調査報告)一年間に各工場が活動した日數に就いての調査報告が擧げられてゐる。カスペロフ氏はこれ等の資料を民衆派の學說の有利に巧利化さうと急ぎ、「ロシアの工場は一年平均一六五日働く」とか、「我國に於ける工場の三五%は一年に二百

日以内働く。』など、計算した、(註。『ロシアに於ける工業發達の統計的總計』全露經濟協會會員ツ  
ーガン・バラノーフスキイの報告。この報告が動機となつて起つた協會第三部會議に於ける議  
論……サンクト・ペテルブルグ。一八九八年、四一頁)結局、『工場』なる概念の不定の爲に、斯の  
如き總數は、労働者の如何なる數が一年に幾日仕事をしたかが示されない以上、殆んど何等の  
意義をも有つものでないことが分る。吾人は先に瞥見した通り(第七章に於て)、製造所工場勞  
働者總數の約四分の三を占めてゐる(一〇〇人またはそれ以上の労働者を有する)大工場に關す  
る『一覽表』中の妥當な資料を總計して見た。その結果一年に於ける労働平均日數が、それを部  
類別にすると、左の如くであることが分つた。即ち(A)二四二、(B)二三五、(C)二三七(註。  
注意して置くが、Aの部類は一〇〇人——四九九人の労働者を有する工場を網羅するもので、  
Bの部類は五〇〇人——九九九人、Cの部類は一、〇〇〇人またはそれ以上の労働者を有する工  
場を網羅するものである。)で、大工場全部に取つては、二四四である。若し一労働者の平均勞  
働日數を決定するならば、一年の労働日數二五三日となる——これは大工場に於ける労働者の  
平均日數である。『一覽表』に於ては、製造業は一二の部門に區別されてゐるが、その中でたゞ

一部門に於てのみ平均労働日数は、下級部類の爲に二〇〇日以内となる。即ちそれは第一一部門（食糧品製造業）で、（A）一八九、（B）一四八、（C）二八〇となる。この部門のA及びBの部類に屬する工場に於ては、一一〇、五八八人の労働者が——大工場に於ける労働者總數（六五五、六七〇人）の一六・二%が働いてゐる。言つて置かねばならぬのは、この部門に全く種類を異にする製造業が結合されてゐることである。即ち甘菜製糖業と煙草製造業、酒造業と製粉業と云つた具合である。その他の部門によると、一工場に對する平均労働日数は、左の如くである。（A）二五九、（B）二七一、（C）二七二。斯く工場が大きい程、一年間の工場従業日が多い譯である。それ故に歐露に於ける最大工場の全部に關する一般的資料は、モスクワ衛生統計の結論を立證し、且つ工場が常備工場労働者の階級を造り出すことを證明するものである。

それ故にロシアの工場労働者に關する資料は、『資本論』の次の如き理論を完全に立證する。即ち大機械精工業は、工業住民の生活事情の中に、完全な、そして思ひ切つた大變革を惹起し、工業住民を全く農業と、この農業に關係した家長生活の數世紀間に作られた傳統とから分離して了ふと云ふ理論である。然しながら大機械精工業は、家長的關係と小ブルジョア的關係とを破

壊すると同時に、一面からは農業と工業とに於ける雇傭労働者を接近せしめるやうな事情を作る。即ち第一に、大機械精工業は、最初非農業中心地に於て作り出された商工的生活組織を一般に村落へ移す。第二に、大機械精工業は住民の移動性と、農村労働者並に營業労働者の大雇傭市場とを作る。第三に、大機械精工業は、農業に機械を入れると同時に巧みな工業労働者を村落に引き入れる。而もこの工業労働者の生活水準は、極めて高い。

## 十二 ロシアの工業に於ける資本

### 主義發達の三階程

こん度は我國の工業に於ける資本主義の發達に關する資料から出て來る幾多の根本的結論の總計算をすることとする。(註。序文に於て指摘した通り、吾人は改革以後の時代に制限されてゐるので、農奴制度の下にある住民の労働を基礎とした工業形態には手を觸れまい。)

この發達の主要な階程は、三つある。即ち小商品製造業(主に農民の小營業)——資本主義的

粗工業——工場（大機械精工業）である。我國には『工場制工業』と『家内工業』との分離に關する見解が廣く行はれてゐるが、事實はこの見解を全く反駁してゐる。その反對に、この兩者の分離は、純人工的のものである。吾人の示した工業形態の關係と繼承とは——極めて直接なものであり、また極めて密接なものである。事實は、小商品製造業の根本的傾向が、資本主義の發達にあること、特に粗工業の組織にあること、更に粗工業が吾人の眼から見ると、非常な速力で大機械精工業に生長しつゝあることを全く明瞭に示してゐる。工業の漸進的形態間の密接な直接關係の最も浮刻的な表現の一となつてゐるのは、次の如き事實らしい。即ち幾多の大工場主及び最大工場主そのものは、小工業家中の小さいもので、凡ゆる階段を経て『國民的製造業』から『資本主義』まで通過した者であると云ふ事實である。サヴワ・モローゾフは農奴で（一八二〇年に身受けされた）牧者で、馭者で、織物労働者で、職工なる家内工業家で、歩いてモスクワへ行き、その商品を買占人に賣つたものであるが、やがて小作業場——分配事務所——工場の所有者となつた。彼は一八六二年に死んだ。その時は彼と彼の多數の息子等の所には、二つの大工場があつた。一八九〇年になると、彼の子孫に屬する四つの工場には、三萬九千人の労働者



が従業してゐた。そして彼等は二千五百萬留に相當する製品を生産してゐる。(註。『ウラヂー  
ミル縣の工業』第四の五——七頁。『工場案内』一八九〇年度分。シシマリョーフの『ニゼゴロド  
鐵道並にシエイスコ・イワノーフスカヤ鐵道地帯に於ける工業管見』サントクト・ペテルブルグ市。  
一八九二年、二八——三二頁)ウラヂミール縣の絹織物製造業に於ては、幾多の大工場主は、織  
物労働者と織工なる家内工業家とから生長して來たものである。(註。『ウラヂミール縣の工業』  
三の七頁以下)イワノーヴォ・ヴォズネセスク市の最大工場主等(クワーエフ家、フォーキン家、ズ  
ーブコフ家、コクーシキン家、ボブロフ家及びその他)は、家内工業家の出である。(註。シシマ  
リョーフの五六——六二頁)モスクワ縣に於ける錦襪織工場は、何れも皆家内工業家の仕事場  
であつた。(註。『モスクワ縣統計集第七卷第三部。モスクワ市。一八八三年。一七——一八頁。』  
バヴロフスキイ地帯の工場主なるザヴィヤローフは、まだ一八六四年に『彼自身が職工ハバーロ  
フの所に使はれてゐた單純な労働者であつた時代を生々と追憶した。』(註。ラーブヂン、一の  
一〇五頁)工場主ワルイパーエフは、小家内工業家であつた。(註。同上、六六頁)コンドラー  
トフは家内工業家であつた頃、自分の製品を入れた鞆を持つて、徒歩でバヴロヴォ村へ行つたも

のである。(註。グリゴリーエフ、一の三六頁)工場主アスモーロフは、小間物屋の馬追ひであったが、次には小商人となり、小さい煙草製作職場の所有者となり——更に數百萬留の流通資本を有つた工場の所有者となつた。(註。『歴史的統計概観』第二卷、二七頁)なほかうした例は、無數である。これ等の場合に於て、または斯の如き場合に於て、經濟派——民衆派が、『人工的』資本主義の開始と『國民的製造業』の終末とを如何に決定するかを見るのは、興味あることではあるまいか？

前記の三つの根本的工業形態は、先づ機械の構造の差異によりお互に異つてゐる。小商品製造業の特質は、全然幼稚な手廻し機械である。この機械は、殆んど想起し得ないやうな時代から變りがない。工業家は、依然として農民で、傳統的な原料品加工方法を採用してゐる。粗工業は、分業を招來する。分業は技術に根本的な改造を加へ、農民を職人に變へ、『部分品製作労働者』に變へる。然しながら手工々業は、従前のまゝである。製造業は手工々業を根據としてゐる爲に、その進歩が極めて遅々たるものであることは、免かれ難い。分業の組織は、混沌たるもので、農事と同様傳統に従つて分業が行はれてゐる。たゞ大機械精工業のみが、根本的變

化を齎し、手工を絃外に投げ出し、新らしい合理的原則の上に製造業を改造し、現代の科學を系統的に製造業に適用する。ロシアに於て資本主義が大機械精工業を組織するまでは、資本主義がまだ大機械精工業を組織しない工業範圍に於ても、吾人は技術の殆んど完全な停滯を見、一世紀も以前に製造業に應用されてゐた手廻し織物機や水力若くは風力製粉所などの使用を見る。その反對に工場に從屬してゐる工業範圍に於て、吾人は完全なる技術的變革と機械製造方法の非常に迅速な進歩とを見る。

吾人は技術的組織の差異に關連して、資本主義發達階程の差異を見る。小商品製造業と粗工業との特質をなしてゐるものは、小作業場の優勢である。そしてこれ等の小作業場中から、僅かな大作業場のみが分類されてゐる。大機械精工業は、小作業場を全然驅逐して了ふ。資本主義的關係は、小營業に於ても（雇傭労働を有する職場と商業資本との形に於て）形造られる。然しこの資本主義的關係は、此處ではまだ十分に發達せず、製造業に關與する人物の集團間の截然たる對峙とはならない。此處にはまだ大資本も、廣い範圍に於けるプロレタリアートの階級もない。吾人は粗工業に於て、この兩者が形造られるのを見る。生産資料の所有者と労働者

との間の深淵は、既に甚だしい程度に達してゐる。「富裕な」工業移住地が発生して來る。其處で住民の大多數を成してゐる者は、完全な無産労働者である。莫大な金を有つて原料品の買込みと生産品の賣捌きとに躍起となつてゐる小數の商人——及びその日／＼の生活をしてゐる多數の部分品製作労働者——これが粗工業の全體的光景である。然し小作業場の豊富と、土地との關係の保存と、製造業及び凡ての生活組織に於ける傳統の保存とは、粗工業の各極端の間に多數の調停要素を造り、これ等の極端の發達を阻止する。所が、大機械精工業に於ては、これ等の支障は、除去される。極端な社會的對峙は、最高の發達を遂げる。資本主義の凡ての暗黒な方面は、一ヶ處に集中されるかのやうである。即ち機械は、周知の如く、労働時間の無限の延長に大なる衝動を與へる。製造業には、女子と子供達とが引き込まれる。失職労働者の豫備軍が形造られる。(工場生産の條件によつても、形造られる筈である。)然し工場が廣大な範圍に於て行ふ労働の統一と工場に働く住民の感情や觀念の改造とは、(殊に、家長的傳統と小ブルジョアの傳統との破壊は、)反動を喚起する。即ち大機械精工業は、先行階級と異つて、生産の計画的調節と社會的生產監督とを熱心に要求する。(この趨勢の表現は、工場法の制定であ

る。

生産發達の性質そのものは、資本主義の種々なる階程に於て變化する。この生産發達は、小營業に於ては、農民經濟の發達に随つて進む。市場は極端に狭い。生産者から消費者までの距離は遠くない。微々たる生産量は、餘り動搖のない地方的需用を容易に満すことが出来る。従つて最大の安定が、この階程に於ける工業の特質を成してゐる。然しこの安定は技術の停滯と中世紀的傳統の凡ゆる遺物に蔽はれた家長的社會關係の保存とに等しい。粗工業は大なる市場を相手に活動する。時としては全國民を相手に働く。これに應じて生産も資本主義に固有してゐる不安定の性質を帯びる。そしてこの不安定は、工場に至つて、最大の勢力に達する。大機械精工工業の發達は、躍進によらなければ、即ち隆盛期と危機との週期的交代によらなければ、行はれるものではない。小生産者等の破滅は、大なる程度に於て工場のこの躍進的生長によつて強められる。労働者等は、隆興時代には或る多數工場に引きつけられたり、或は突き放されたりする。大機械精工工業の存在と發達との條件となるものは、失職者と何んな仕事にでも取りかゝらうとする人々とから成る一大豫備軍が編成されることである。この豫備軍か、農民

社會の如何なる等級から募集されるものであるかと云ふことは、吾人が既に第二章に於て示した通りであるが、次の章には、最も主要なる種類の仕事をも指摘した。資本はこの仕事の爲にこれ等の豫備軍を準備して置くのである。大機械精工業の『不安定』は、常に或る人々の反動的不平を呼び起したし、また呼び起しつゝある。彼等は小生産者の眼で事物を見続け、たゞこの『不安定』のみが、生産方法と一切の社會的關係との迅速な改造によつて、從來の停滯を變へたものであることを忘れてゐるのである。

この改造の一表現となつてゐるのは、工業と農業との分離と、兎角農村經濟に引かれ勝ちな農奴制度や家長制度の傳統からの工業上に於ける社會關係解放とである。工業家は小商品生産に於て、まだすつかり農民から脱出してゐない。彼は多くの場合に於て、耕作者として残つてゐる。そして小農業とのこの關係は、極めて深刻なものであるから、吾人は工業及び農業に於て小生産者等が併行互壞して行く興味ある法則を見る。小ブルジョアと雇傭労働者との分離は、國民經濟の二つの範圍に於て、相提携して進み、斯くして瓦解の兩極に工業家と農業家との分裂を準備するのである。この分裂は、粗工業に於て更に甚だしい。農業に従事しない幾多

の工業中心地が形造られる。工業の主なる代表者となつてゐるのは、もう農民ではなく、一方商人と粗工業家とであり、他方『職人』である。工業や比較的發達した他の世界との商業關係などは、住民の生活水準とその文化の程度とを高める。粗工業の労働者は、最早農民——耕作者を見下す。大機械精工業は、この改造を完成し、工業と農業とを完全に分離し、既に吾人が瞥見した如く、住民の特別階級を造る。かうした特別階級は、舊農民の間にはなかつた。この特別階級は、他の生活組織と異つた組織の家族關係と高い水準の物質的並に精神的要求とで舊農民から區別されてゐる。小營業に於ても粗工業に於ても、吾人は常に家長關係並に種々様々な個人的服従形式の遺物を見る。この遺物は、資本主義的經濟の一般的事情に於て、勤勞者の境遇を著しく惡化し、彼等を虐げ、且つ墮落させる。大機械精工業は、屢々國內の隅々から集まつて來る多數の労働者を一ヶ處に集中すると同時に、家長制度の遺物や個人的服従制度の遺物と絶對に和睦せず、『過去に對する輕蔑的態度を』著しく示す。陳腐になつた傳統とのこの分裂は、生産調節と社會的生產監督との可能を造り、その必要を喚起する根本的條件の一であつた。若し工場によつて住民の生活條件が改造されるものと云ふことを述べるならば、特に左

の如き點に注目する必要がある。即ちそれは女子と少年とを生産に引き入れることが、(註。歐露に於ける製造所及び工場に關する『工場案内』の資料によると、一八九〇年に使役されてゐた労働者の總數は、八七五、七六四人で、その中二一〇、二〇七人(二四パーセント)は女子で、一七、七九三人(二一パーセント)は少年で、八、二一六人(一パーセント)は少女であつた。)その根本に於て進歩的現象であると云ふことである。資本主義的工場が、労働住民のこれ等の部類を特に困難な状態に陥れてゐること、これ等の部類の労働住民に對する關係から云ふと、労働時間を短縮し、これを調節することや、労働の衛生状態を安全にすることなどが特に必要であるが、女子や少年の労働を全く禁止するとか或は女子や少年の労働を除いた家長的生活組織を支持するとか云ふやうな傾向が、反動的で、且つ幻想的であると云ふことは、争ふ餘地がない。大機械精工業は、以前狭い範圍の家庭關係や家族關係から脱しなかつたこれ等部類の住民の家長的蟄居を打破すると同時に、また彼等住民を社會的生産に直接關與するやうに勧誘すると同時に、彼等の發達を促進せしめ、彼等の獨立心を高める。即ち資本主義以前の關係の家長的安定より比較にならぬ程高い生活條件を造る。



(註。『貧しい女—織物女工は、父親や夫に代つて工場へ行つたり、父親や夫に關係なく、彼等と一緒に働いたりする。彼女は男と同様に家族養育者である。』『女は工場では自分の夫に關係なく、全く獨立した生産者である。工場に於ける女工の教育程度は、特に迅速に高上しつゝある。』『ウラヂミールの工業』三の一三、一一八、一一二及びその他の頁)ハリヅメーノフ氏の次の如き結論は、全く正しい。即ち工業は『女に對する家族の……そして主人の經濟的支配力を絶滅する……他人の工業に於て女は男と比較される。これは——プロレタリアの平等である。……工業の資本主義化は、家族に於ける女の特立獲得鬭争に於て有力な役目を演ずるものである。』と云ふ結論である。『工業は新らしく、そして家族からも夫からも全く關係のない境遇を婦人の爲に作る。』(『法律通報』一八八三年。第一二號、五八二、五九七頁) 研究家等は『モスクワ縣統計資料集』(第七卷、第二部、モスクワ市。一八八三年。一五二—一五八頁。)に於て、靴下手工製造業と靴下機械製造業とに於ける女工の境遇を比較してゐる。手工製造業では、一日の賃銀が、約八哥であるのに、機械製造業では、一四哥—三〇哥である。機械製造業に於ける女工の境遇は、次の如く如く書かれてゐる。『吾々の前には自由な娘の子がゐる。

彼女は障碍物で少しも壓迫されてゐない、家族からも百姓の女の生活條件となつてゐる凡てのものからも解放されてゐる。その娘の子は、何時でも或る場處から或る場處へ、或る主人から或る主人へ遊牧することが出来る。何時でも仕事なく一片の麩麩なしになることがあり得る。

……手工製造業に於て、編物女工は、極めて貧弱な賃銀を貰つてゐる。そんな賃銀は、食物代を補顧するに足りない。それは分讓地を有つてゐる主人の家族の一人として、一部分この土地の産物を利用して差支へないと云ふやうな條件の下に於てのみあり得る労働賃銀である。所が、機械製造業の場合には、女工は食料品や茶の外に家族以外に生活することを許されるやうな労働賃銀を貰つてゐる。それで彼女は家族が土地から得る収入をもう當にしなくてもいゝ。

同時に機械製造業の現在の條件では、女工の労働賃銀は、更にもつと保證されてゐる。㊦

工業發達の最初の二階程の特質は、住民の土着心である。小工業家は、農民として残りつゝ、農業を以てその村に縛りつけられてゐる。粗工業に於ける職人は、普通粗工業によつて造られる小さい蟄居した工業地域に縛りつけられたものとして残つてゐる。工業發達の第一及び第二階程に於ける工業の組織そのものには、生産者のこの土着と蟄居とを打破するやうな何ものも

ない。種々なる工業地域間の交渉は、稀薄である。工業の他の場處への移轉は、新らしい小營業を國內邊境地方に創立する所の部分的生産者等の移住によつてのみ行はれるのである。これに反して大機械精工工業は、必然的に住民の動搖を造る。各地域間の商業的交渉は、大いに擴大される。鐵道は移動を容易にする。労働者の需用は、隆盛時代には高上し、危機の時代には下落しつゝ、一般にも全體としても多くなる。それ故に労働者が或る作業場から他の作業場へ、國の或る一端から他の一端へ移動することは、必然となる。大機械精工工業は、幾多の新精工業中心地を作る。これ等の中心地は、以前見たこともない速力で時としては人の住まない場處にさへ發生する。——これは労働者の多數の移動なくしてはあり得ない現象である、吾人は後に所謂非農業的出稼營業の範圍と意義とに就いて述べるつもりであるが、今はモスクワ縣による自治會衛生統計資料を簡單に示すに留めよう。一〇三、一七五人の製造所工場労働者に對する質問は、或る市外地帯の土地生れの労働者中五三、一三三八人、即ち總數の五一、六%迄が、自分の市外地帯の工場で働いてゐることを示した。それ故に全労働者の殆んど半數は、或る市外地帯から他の市外地帯へ移つて行つたのである。モスクワ縣に於ける土地生れの労働者

は、六六、〇三八人で一六四%であることが分つた。(註。工業地帯として餘り發達してゐない  
スモレンスク縣に於ても、五千人の製造工場労働者に對して行はれた質問は、彼等の中八〇%  
がスモレンスク縣生れの者であることを示した。(ヂバーンコフ、一の二、四四二頁) 労働者  
の三分の一以上は——他縣からの外來労働者である。(主に中央工業地帯なるモスクワ縣に隣接  
する諸縣から來た者である。)のみならず、各市外地帯を比較して見ると、工業の最も盛んな市  
外地帯は、その地帯内の労働者を最も少ない割合で有つてゐることが分る。例へば、工業の餘  
り發達してゐないモヂャイスク市外地帯並にヴォロコラームスキイ市外地帯に於て、製造工場勞  
働者の九二—九三%は、自分の働いてゐるその土地で生れた者である。工業の非常に發達した  
モスクワ、コローメン及びボゴロドスキイ等の市外地帯に於ては、その土地生れの労働者の割  
合は、二四%—四〇%—五〇%にまで下る。それ故に研究家は次の如き結論を下す。即ち『市  
外地帯に於ける工場生産の著しき發達は、この市外地帯への外來要素の流入に好都合な事情を  
作る。』と。これ等の資料は、工業労働者の移動の特質が、耕作労働者の移動に就いて吾人の  
立證した點と同様であることを示してゐる。(自分から補足してゐる。)即ち工業労働者等は、